

訂修新撰國語讀本 佐々政一編 卷八

3159  
Sal9  
資料室

41506

教科書文庫

4
810
41-1918
200030
1537

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM. Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM. Kodak





資料室  
日六十月一年七正大  
濟定檢省部文  
用科語國校學中

3759  
509

文學博士佐々政一編

訂修  
新撰  
國語讀本



株式會社明治書院



訂修新撰國語讀本卷八目次

- 一 趣味……………一
- 二 雨の平泉……………五
- 三 東洋の詩趣……………九
- 四 牧兒の歌……………一三
- 五 古今東西を包容せよ上……………一五
- 六 古今東西を包容せよ下……………二〇
- 七 エマーソンの警語……………二五
- 八 紅葉山人を祭る文……………二九

目次



九 藤岡博士葬儀の弔詞……………三〇

一〇 歌人西行上……………三五

一一 歌人西行下……………四一

一二 靈感上……………四六

一三 靈感下……………五一

一四 尺牘の秘訣……………五八

一五 徒然草抄……………六八

一 折節のうつりかはり……………六八

二 猫また……………七十二

三 聖海上人……………七三

四 人の心……………七五

五 花と月……………七六

一六 落花の雪……………七七

一七 吉野朝廷時代の文學……………八三

一八 寛成親王鷹狩の事……………九〇

一九 狂歌……………九四

二〇 會津落城上……………九七

二一 會津落城下……………一〇四

二二 關が原古戰場……………一〇九

二三 能……………一一三

二四 羽衣……………一一九

二五 能狂言……………一二六



二六 薩摩守……………一三一

修訂新撰國語讀本卷八目次終



修訂新撰國語讀本卷八

一 趣味

趣味は人の嗜好なり、見識なり、思想なり、氣品なり、性情なり。性情は淘汰せざるべからず。氣品は須らく清高なるべし。思想は汚下ならざるを要す。見識は卑陋なる無きを欲す。嗜好はひと節ありたし。趣味の無下に低く淺きは口惜しきことあり。自ら培ひ、自ら養ひ、自ら生したてて、我がおのづからなる心の色の花と生り出づべき趣味をば、秀で榮えしむべ



きなり。

目覺むるやうなるを好むあり、心締まるやうなるを悦ぶあり。淡きを好しとするあり、濃きをいとしいふあり。豔に麗しきをめづるあり、沈みて銹あるをのぞむあり。人の趣味は人の面の形の異なり、聲の色の殊なるが如くに、千差なり、萬別なり。自を以て他を律すべからず。彼に従ひて此を枉げむも亦難し。趣味は人人の心の花のおのづからなる色なればなり。花を染めて本の色ならぬ色と作し、これを洗ひて本の色ならぬ色と作さむとすとも、誠に夫れ何の甲斐かあらむ。されどもそれぞれの花は培ひ養ひ、よくよく生したてて、その自然の色を、春秋の天の下に、心ゆくばかり豊かに放ち

舒びしむべし。人人の趣味は培ひ養ひ、よくよく生したてて、その自然に基く趣味の香を、おほどかに世に發ち薫らしむべし。

足らざるを知るは滿つるに到る路なり。至らざるを悟るは上に向ふ途なり。吾が趣味のなほ足らざるを知り、なほ至らざるを悟る者は幸なり。其の人の趣味將に漸く進み、漸く長ぜむとす。吾が趣味の稚なきをも省みて、我が善しとするものを必ず善しとし、我がをかしとするものをいつもをかしとして、高きに遷り、卑きを改むることをせぬ者は幸無し。其の人の心の花既に石と化りて、生命を失ひ居ればなり。簪の必ず黄金ならむことを欲し、衣の必ず縮緬ならむこ



とを欲するは慾望といふものなり。趣味といふものにはあらず。慾望は我を桎梏す、自在なし。趣味は我を繫縛せず、自由あり。趣味低く、慾望強ければ、其の欲するところの物を得ざるに當つては、苦惱千萬端ならむ。趣味高く、慾望淡くば、其の欲するところの物を得ずとも、適樂一二様のみならじ。雞兒腸の花の幽かなるを簪にすとも、棣棠の花の香なきを簪にすとも、薔薇の一輪の白く苔めるを簪にすとも、落霜紅の數顆の紅なるを簪にすとも、其の人の趣味より見て善しと爲さむには、木の端、竹の片を簪にすとも、亦復満足と喜悅とは有るべし。時に應じ、處に従ひて、何の時にも、那の處にも、怡悅の情を見出し得るは、趣味のなすところなり。其の物を得ざ

れば苦しみ、其の願を遂げざれば惱み、吾が心を外の物の奴婢として、その使役するところとなるは、慾望の然らしむるなり。慾望は人を窘しめ、趣味は人を活かす。趣味饒なる人は幸なるかな。

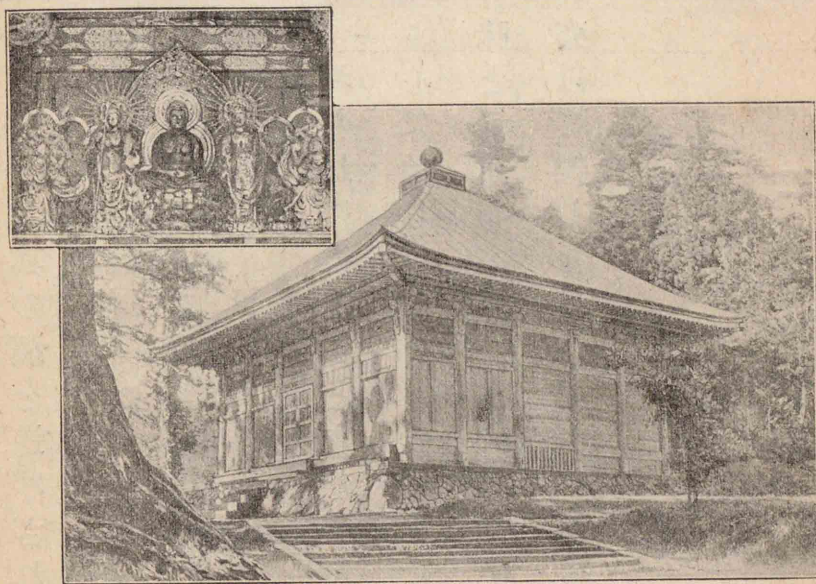
おのれに得ること有りて人に待つこと無き、之を徳と云ふ。心に怡しむことありて物に累はさるることなき、之を趣味と云ふ。苟もよく趣味を有するや、荒涼凄寒の境に在るも、亦以て樂しむべし。培ふべし、生したつべし、人の趣味性。

(幸田露伴―洗心録)

## 二 雨の平泉



（四六一三五）\*



金 色 堂 及 び そ の 内 部

平泉近き亂馬山下の人  
 大槻磐谿に、「三世豪華擬<sub>二</sub>帝  
 京、朱樓碧殿接雲長。只今惟  
 有東山月、來照當年金色堂。  
 又「上國戰塵不<sub>二</sub>飛到<sub>一</sub>春風占  
 斷九十年」の詩あり。平泉覽  
 古の感を舒べ、然も藤原秀  
 衡の榮華を評し得て眞な  
 り。今日平泉の遺跡中尊寺  
 を訪ふ。季、秋にして偶、雨に  
 會せるは恰好の時なり。

平泉驛より十餘町、幾多の古蹟を屐齒に踏みて、坦道を右折し、田圃の閒を行き、竹樹の兩方に相迫れる、滑石の磊砢たる小阪路を上げば、即ち高館の址なり。古の高館は東西四百六十間、南北百三十間、高さ五十間なりし由、今は阪を上り盡したる所、平地幅十間に足らず。熊笹に縁取りたる丘の裏は、直に是斷崖絶壁、北上川の波その岸脚を嚙む。

此の丘を更に左折すれば、老杉暗き處、石磴數級、寒煙荒草の裏、方一間ばかりの堂あり、額して白幡大明神といふ。楹柱、龕扉盡く雨虐、風慘に磨き出されたる木理露はに、賽錢箱は斜に臥して、寂かなる樹に鶉啼き、小枝の雫傘を打つて韻あり。これ義經堂なり。



義經堂より數歩にして、一坪ばかりの地を圍ひたる木柵あり。半ば朽ちて倒れたり。明治九年、聖上御巡幸の際の御座所なりといふ。七百餘年も三十餘年も、時の推移は兩ながら物象の荒廢を免れざるか。

御座所の傍より眺めたる景色は絶佳なり。山櫻・楓樹錯落として霜に染めたる紅黄を瞰視すれば、直下に虚舟あり。北上川の曲流、丘陵・田園を縫ひて、その末杳然として平郊にかすむ。川の左に小橋架せる枝流の、森の蔭に白きは衣川。對面の美しき山は東稻山。西行の「みちのくのたばしね山の櫻花よし野の外にかかるしら雲」の詠によりて、更に北上流域の景致を添へしむ。

\*芭蕉が奥の細道の句。

高館の風景は、上る處高からざる丘陵が、上りて思ひがけ無く、山上俯瞰の大觀をなすにあり。極目蒼茫、秋雨のしぶきを浴びて低回すれば、悲風遠くより來つて、感慨更に深し。

十勝高原、薩隅間より眺めたる櫻島灣、長野城山館より見たる川中島等、孰れも予が漫遊中、印象淺からざる景色なれど、情味の伴うて深かりしは此の高館なり。松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し。とせば、此の高館の大觀は、北上川を帯びて靜思せるものといふべきか。（角田浩浩—漫遊人國記）

### 三 東洋の詩趣

余が欲する詩は世間的の人情を鼓舞する様なものでは



(一) Shelley,  
(1792—1822)  
英詩人、雲雀に與ふる詩を以て知らる。

ない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少なからう。どこ迄も世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なる者も、此の境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も、同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シエレ！が雲雀を聞いて歎息したのも無理はない。うれしい事に、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

(二) 陶淵明の詩。

採菊東籬下。悠然見南山。

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに鄰の人が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。

深林人不知。明月來相照。

只二十字の内に、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は近世の小説などの功德ではない。汽船・汽車・權利・義務・道德・禮義で疲れ果てた後、凡てを忘卻して、ぐつすと寢込む様な功德である。二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀

(三) 竹林館と題する王維の詩。



に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、態、吞氣な扁舟を浮べて、此の桃源に溯る者はない様だ。

余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布教して廣げようと云ふ心掛も何もない。只自分には、かういふ感興が、演藝會よりも、舞蹈會よりも藥になる様に思はれる。フアウストよりも、ハムレットよりも有り難く考へられる。自分がただ一人、繪の具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそのそ歩くのも、全く之が爲である。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも、非人情の天地に逍遙したいからの願一つの醉興だ。

(二) 唐の詩人。(三五九)

(三) 晉の詩人。(四一五)

(四) Hamlet. 英の大文學者の作。

(三) Faust. 獨の大文學者ゲーテの作。

(四) Hamlet. 英の大文學者の作。

(夏目漱石)

### 四 牧兒の歌

野ぢのゆふ川月さえて、  
ま玉をそそぐさざれ浪、  
渡る小牛の脊に乗りて、  
ゆくは何處の躑ならむ。

あはれ催すゆふぐれに、  
うちながめつつ嘯けば、  
いとど急がぬ小牛まで、  
心ありけるあゆみかな。

雲わく峯にのぼりては、  
嵐にふえをすさびつつ、  
花さく野べに交りては、  
小鳥と共にうたふなり。



朝に出づるともとては、ただこの牛とこの小笛、  
夕にかへるともとても、又この牛とこのをぶえ、

ちりの巷をふまざれば、けがれだにせぬ雙の足、  
金かねと名とを逐はざれば、曇くももあらぬおのがむね、

すげの小笠に雨すぎて、折らぬに月は懸れるを、  
桂懸けむと、世のひとは、いづくの空に騒ぐらむ、

谷間の清水、おりたちて、むすべば甘き水のあぢ、

百のこがねに、世の人の、替ふてふ酒も何せむに、

けはひなまめく柳かけ、よしうかれ浮男おとこは酔はば酔へ、  
我はこの脊を住家にて、憂き世の外に樂しまむ、

(武島羽衣)

五 古今東西を包容せよ上

骨董店に入れば、火鉢・香爐・木像・器皿等、鏽びもしくは煤け  
たる所に、何等かの趣味の存するを認む。轉じて當世の裝飾  
品を取扱ふ店に入れば、金銀・玻璃・燦爛として人目を眩耀し、  
その美麗なること骨董店の薄暗きと殆ど晝夜の別ありし

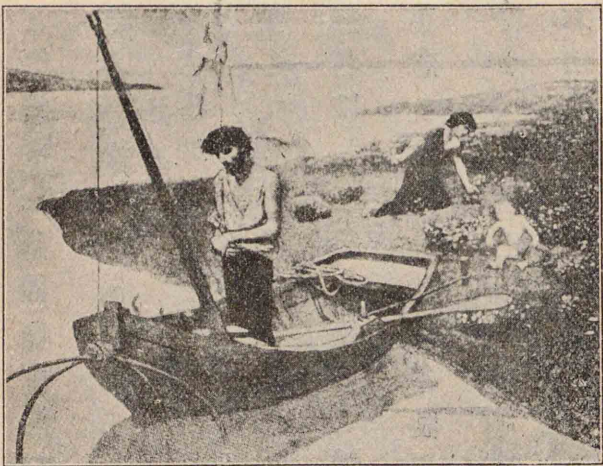


かも見る事久しくして興味の竭くるを覺えずとせず。蓋し前者は全く過去に屬し、而して後者は單に現在に止まる。過去現在の差あれども、ある一時代に限らるるや即ち一なり。若し最も價值ある者を求めば、過去現在を通じて、なほ將來にも及ぶべきを想はざるべからず。舊製と新製との如き、深く問ふべき所ならず。

繪畫にありても、雪舟(一)や元信(二)や探幽(三)や光琳(四)や皆大いに賞讃すべきも、油繪を見慣れし眼よりすれば、種種の缺點を指摘すべく、中には遠近法の見苦しきあり。されど普通の油繪もまた永く賞美するに堪へず。油繪の畫工は常に舊東洋流を斥くるのみならず、互に派を分ちて技巧を競ふに専なれ

- (一) 雪舟。(1020-1090)
- (二) 狩野元信。(1334-1391)
- (三) 狩野探幽。(1570-1613)
- (四) 尾形光琳。(1657-1716)

(五) Chavannes.  
(1824-1893)  
佛の畫家。



筆 マ シ ャ ヴ ァ ン

ど、その大家と稱せらるるものは、徒に一時代に拘拘たらず、古今東西に亙りて戻らざるもの如し。かのシヤヴァンヌ(五)の如き即ち然り。人も物も或一時代に限れるは、それだけ規模の小なるものなり。大なれば大なるほど、益、時代を超越する所あるべし。時代を超越すとは、己の時代に關係なきの謂ならず、能く時代の變易を凌ぎ、十百世の後に及ぶも化石扱にせらるることなく、依然として存命するの謂なり。



英雄・豪傑として傳はれりとして一槩に稱すべきに非ざれど、その主なる者の、百世の下なほ健在するが如くなること争ふべからず。人は必ずしも英雄・豪傑として顯れざるべからざる理なく、その然るは境遇に因るもの多くして、特に希望して得らるるに非ず、又必ずしも希望すべきに非ず。或は無名にして終るの卻て貴ぶべきあれども、若し修養といふを念とせば、一時代に限られざるの優れるに若かず。世にはとかく舊學と新學と相容れざる形あり。少壯者は唯新を追ふに急にして、古を温ぬるは、新を知るの害となるとも、利とはならずとして抛ち去る。かかるは獨り我が國のみならず、日進を旨とする國國一として然らざるなし。歐洲に於て、希

臘語・羅旬語は久しく必修學として重んぜられしが、近時漸く弛廢し、獨逸皇帝の如きは軍隊に敕を發して、古典の代りに當代の語學を修むべきを言へり。實



雪に競争の激烈なる  
舟今の時代に於ては、  
筆ひとへに舊を棄て  
新に就くこと已む  
を得ざるべけれど

も、亦遽かに槩括し去るべからざる事情なきにあらず。科學的知識を得るには、能ふかぎり新なるを採るべく、古説に屬



するものは、聖賢の語といふとも斷じて顧みるを要せざれども、人生問題に關しては、常に古人の棄つべからざるのみならず、寧ろ大いに重んずべきことあり。實驗室に籠りて研究に忙はしく、もしくは事務室に在りて執務に忙はしく、他に心を分つゝの暇なき人人に對しては望み難きことなれども、多少の餘裕あらば、單に當世を修めずして、更に古來英傑の爲し來りし事蹟を攷ふるの頗る益あるべきこと、言はずして明かならむ。

### 六 古今東西を包容せよ 下

\* マクス・ミュレルは古典學者にして最も古典を重んじ、新

\* Max Müller.  
(1823-1900)  
獨逸の言語學者。

學よりも希臘・羅甸を推ししほどにて、偏固と呼ばるるを免れざりしかど、その彼が如くなりしは一分の理なしとせず。彼は學者中の世間通にして、優に紳士として交際場裏に出づるを得たり。しかも學術に關しては曰く、「吾はみづからの經驗に徴して、今日の學問に反對す。今の所謂知識は切りて乾かしたる知識にして、插花と同一の運命を有す。一夕の觀賞に供すべけれども、日ならず凋萎して、何の殘る所無し。眞の知識は斯くの如くならずして、必ず一生涯に互りて繼續するを要す。即ち始あり、中あり、又終ありて、常に生命の充つるを要す。かかる知識は外觀に於ては少量と見ゆべけれども、實は生涯に必須なる知識の甚だ少量なるを察せざるべ



からず」と。この言、老人の頑癖に出でしに似たれど、少壯者は他山の石と心得て可なり。今の活社會に立ちて活運動を爲さむとする者は、煩瑣なる事理に通ずるよりは、人間の如何に活動するかを具體的に識得するを善しとすることあり。新知識の日に月に増殖する今日に於ては、往日の如く古典に耽るを得ず。古典を讀む者も年を逐うて減ずべけれども、幾許かこれに通ずるは、その人の修養に益し、併せて公共に處するの術に益せむ。

新學問・新知識のみにては完備せる紳士となり難し。日夜實驗室に顯微鏡を覗ふ人にして、立派なる紳士たる者無きにあらざれども、晴の場所に活躍する者は、更に古今を達觀

し、英傑の出處進退に通ずるの、便利多きを見む。世は過・現・未の集合なり。世間の多くはその一部分に拘り、或は過去に頭を没し、或は現在に齷齪し、或は徒に將來を想望すれども、多少にても經綸を意とせば、斯く一時期に偏せずして、宜しくすべての上に大觀する所なかるべからず。世界の基督教國民が二三十年前の猶太の歴史を誦するを觀ても、その如何に過去に篤きかを推すに足らずや。舊約全書の瑣談を記憶すると、希臘羅馬の史傳に通ずると、いづれか知識に益すべき。一を取らば他の一を捨つる理なきに非ずや。新事に交へて古事を語り傳ふるは、冥冥裏に人生に影響し、風俗を敦厚にして趣味を豊富にするの效あり。近來古典を學ぶ事漸



く衰へたれども、これ之を學ぶものの少なきにあらず。品性を重んずる家族にては、舊に依りてこれに重きを置き、人格陶冶を事とする大學にても亦然す。彼に在りては、稍、品位ある紳士は、希臘・羅馬の事蹟を現代同様に語り得ざるを恥辱とす。過ぎたるは猶及ばざるが如く、その甚しきに失するの弊害たるは勿論なれど、苟も然らずんば、則ち修養に益すること鮮少ならざらむ。

近頃國人の瑣事に齷齪し、眼前の利益に汲汲たるは、世態の複雑に赴きて、ただ大體に通ずるのみにては事を處するに堪へざるに因ると雖も、又偉人物の胷中に風月洗ふが如きものあるを聞かざるに因る。傍人を見れば、或は皆滔滔と

して小利・小害を争ふの觀あるべしと雖も、古に溯り、遠きを尋ぬれば、必ずや我を教へ、我を導くに十分なるものあらむ。現代の新學問・新知識は飽くまで修むるの必要あれども、少しにても遊ぶの餘裕あらば、歷世の人豪を想察し、古今・東西を包容せむことを期するを要す。知識の進歩は歲月と地方とによりて異なれども、人格の進歩は爾く著しからず。現在に專なるものは、閒口廣けれども、奥行なし。更に奥行を深くするの心得なくして可ならむや。(三宅雪嶺)

### 七 エマーソンの警語

一、萬物は皆自ら自己の歴史を描く。轉岩は山に其の痕跡を



殘し、河は土地に其の溝渠を通じ、動物は地層に其の骨を遺し、蕨は石炭に其の葉形を留む。

一、自己を信ぜよ。何人の心も此の鐵線に觸るれば鳴る。



エマソン肖像

一、俗世に於て俗世の説に従つて生活するは容易なり。

野外に於て自己の説に従つて生活するは容易なり。

英雄は之に反し、俗世に在

りながら、綽綽として野外の獨立を有するものなり。

一、人は何ぞ怯懦なるや。人は「余は思ふ。余はかくの如し。」と言ふ能はずして、數、聖賢の語を引證するなり。何ぞ野花潤草

を見ざる。彼等は自然の儘にして匂ふに非ずや。

一、人心の中に大なる海あり。人は之を知らずして他人に一杯の水を求む。

一、此の心歴史を作り、此の心歴史を讀む。人心は同一なり、永遠の一部なり。歴史は主觀的ならざるべからず。

一、我は宇宙の一部なり、宇宙は我の全體なり。故に我の智慧は宇宙の智慧なり、宇宙の本源より流出せる者なり。

一、人間の行爲は二なり、直接と思慮と。而して其の最も人心を感ぜしむるものは直接の行爲なり。

一、差別を見るもの、事實と表面とを見る。才能及び事業の人、而して此の世界の人、實務の人なり。無差別を見るもの、萬

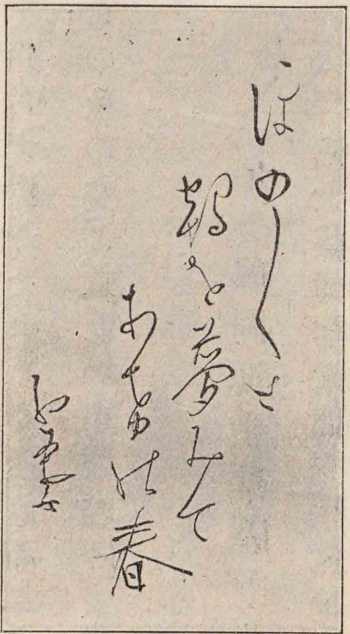


(一) Greenwich.

物の一體を見る。信仰及び哲學の人、而して理想に住む人、  
 天才の人なり。  
 一、原因は結果と分つべからず、方法は目的と分つべからず、  
 種子は果實と分つべからず。結果は原因の中に存し、目的  
 は方法の中に在り。  
 一、社會は新しき技藝を得たり、而も之と共に古き本能を失  
 へり。  
 一、文明の人民は乘輿を造れり、而も之と共に脚の力を失へ  
 り。  
 一、グリニチの星曆は發行せられたり、然れども人は星に  
 就きて無智となれり。(山路愛山—東西六千年)

### 八 紅葉山人を祭る文

深からむ秋をだに、名にしおはば地に驕る花なるべきを、



尾崎紅葉筆蹟

何事ぞ、旻天無情、この絶  
 代の才人を奪へる。行年  
 三十有七、命を假せる壽  
 に於て幾何ぞや。人の齡  
 の限あれば、歩して彭祖  
 に等しかるべからざらむも、せめては生ける常ならむには、  
 ありし世のそれに加へて、更に又貢獻するところの躰まり  
 なからむを。七生文章を作らむと言へる、道に忠なる比すべ

三〇  
上古支那の長壽  
者、傳へいふ七  
百餘歳と。



きものもなきを、この恨いつの世に盡くべしや。遺言耳にあり、温容前に映ず。しかも幽明早く境を異にして、ここにとこしへの別に立てる我等同人、哀悼の感極まりて、殆どいふ所を知らず。雲やそれ、水やそれ。石にさへしみ入るばかり、折からの秋の姿よ。哀しいかな、嗚呼。（硯友社同人）

### 九 藤岡博士葬儀の弔詞

文學博士藤岡作太郎先生逝けり。嗚呼、我が友藤岡東圃君逝けり。我が知友中蒲柳多病なる君の如きは無く、篤學勵精なる君の如きも亦無し。君の宿痾は君の幼時始めて學に就くの齡に發し、爾來一日として君の體軀を惱まさざること

無かりき。然れども君の頭腦は毫もこれが爲に屈服せられず、卻りて異常非凡の發達を爲したりき。余は今より二十年前、大學生として始めて君と相識り、後大學教官として共に國文學の授業を擔當せること茲に十年に及べり。常に君が體力の虚弱なるに似ず、精神力の旺盛なるに驚歎し、深淵なる君の學殖と超邁なる君の識見とに推服し、君の國文科に在るを以て竊かに我が國文學科の誇なりと思惟せり。況や君の蘊蓄はその專攻の國文學に於て無盡藏なるのみならず、美術史に於ける造詣と、卓越せる美術批評眼とは世亦已に定評あるをや。君の著書は大學在學中に起稿せし日本風俗史を始として、近世繪畫史、國文學全史、平安朝編、國文學



史講話松雲公小傳の如き、いづれも材料充實し、結構整頓せるのみならず、文辭流麗、殆ど人を魅する力あり。一として千載に傳ふべき名著にあらざるなし。日常湯藥に親しみたる

君にして、かくの如き大著あり。天の君に與ふる體軀に甚だ薄うして、精神に最も厚かりきといはむか。嗚呼、君は今溘焉として世を捐てたり。我が國文學科の光明は、驀地消失せたり。余は忽ち二十年來の益友に離れ、我が國文學科は俄かに百歲罕に見る良師を喪ひたり。四

君にして、かくの如き大著あり。天の君に與ふる體軀に甚だ薄うして、精神に最も厚かりきといはむか。嗚呼、君は今溘焉として世を捐てたり。我が國文學科の光明は、驀地消失せたり。余は忽ち二十年來の益友に離れ、我が國文學科は俄かに百歲罕に見る良師を喪ひたり。四

十年の短生涯、世人が君に屬望せる幾多の事業を完了せずして、君は明治の文壇を棄去れり。誰か文學界の爲に悲しみ、美術界の爲に惜しみ、國家の爲に一大損失を感じざらむや。回顧すれば、今より數年前、京都大學は君を聘して國文學の教授たらしめむとせり。しかれども君は辭して就かず、ひたすらに江戸時代文學の研究に心を委ね、助教授の卑きに甘んじて、孜孜として今日に至れり。研究ほぼその緒に就き、國文學全史未だ全く成らざるに際し、空しく宿志を齎して泉路に就く。その憾如何ばかりぞや。加ふるに家に儋石の儲なく、堂に垂白の親あり。孩兒三兒の哺養、一に未亡人の手に在るを思へば、誰か哀悼痛惜の情に禁へむや。



然れども君の一生は初より身體の生活に非ずして、精神の生活たりしなり。もとより俸祿の爲に生きず、名譽の爲に生きず、ひとへに學問の爲に生きたりしなり。而して遂に學問のために殉ぜしなり。焉ぞ知らむ、天は暫く君の病軀に四十年の世壽を假して、人の精神の如何に肉體に超越せるかを示ししに非ざるかを。君は逝けども、世に布ける君の著書は、永く我が國文學の光明として學界を照鑑せり。君の音容は復大學の教壇に見るべからず、君の才筆は再び明治の文壇を飾らざれども、我が國文科の學士・學生は深く君の學徳を慕ひ、君の事業を繼ぎ、皆争うて東圃先生の宿志を成さむとす。嗚呼、我が友東圃君はもとより不朽なり。藤岡博士は決

して死するの時なかるべきなり、尙はくは饗けよ。

明治四十三年二月六日

芳賀 矢一

一〇 歌人西行 上

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧、その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉室町の世、そもそも歌道に於て定家を難ぜむ輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて定家の價値いたく墮落したれども、山家集の一書はなほ如何なる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に嘖嘖たるはそもそも何ぞが故ぞ。



西行物語

西行法師俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代代武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せむとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せむとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死したまへり。とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅

一八〇〇。

し、官を辭して許されざれども、棄恩入無爲。は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びてとりすがれるを、これこそ愛著の絆を斷つはじめぞと、顧みもせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。と。かくて名を西行または圓位といふ。出家せる時は保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一蓋の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東



西にさすらひ、自然を友とし、悠悠自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立ててここかしこに嘯きありく條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば頭をうち割るべし。と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。誰そと問へば、西行と申す者といふ。文覺手ぐすねを引き、望の協ひつる體にて、あかり障子を開きて出づ。しばしまもりて、年頃承り及びたるに、御尋悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出でこむかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に

歸り去りしかば、日頃の仰にたがひたるは」と怪しみ問ふ。文覺答へて「あらいひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれむずる者のつらやうか、文覺をこそ打たむずるものなれ」といへりといふ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせむことを思ひて、詠じて曰く、

ねがはくは、花のもとにて春死なむ、

そのきさらぎの望月のころ。

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

\*一八五〇。



(一) 應仁元年(三三〇)より文明九年(三三七)まで十一年間。  
(二) 元祿元年は二三四八に當る。

わが國古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの前後僅かに三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、いづれも亦風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

一 一 歌人西行 下

そもそも平安朝の貴紳淑女は、鴨・桂二川の流域數里の閒を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、從うて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外に知らざれば、詠ずる所の和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖父を承け、ただ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想・辭句の上にもおのづから典型を生じて、天真を忘れたり。かく實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りてその内容を問はざりし時、西行獨り蹶起して、從來蹈襲せ



る典型を鑑卻し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然の隱微を探り、感得する所多かりき。平安朝の末、崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠じ給へることの、世上一般の題詠と撰を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を摹倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫赫として、天成の大才と許さるることまた宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨てて、直に自然の堂奥に入らむとす。深く山川草木を愛して、これを視る事猶己を視るが如く、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。わきて見む、老木は花もあはれなり、

いまいくたびか春にあふべき。

ここにまた、我が住みうくてうかれなば、

松はひとりにならむとすらむ。

濁るべき巖井の水にあらねども、

汲まば宿れる月やさわがむ。

同情は進んで愛著となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ月よ。

おのづから花なき年の春もあらば、

何につけてか日を送らまし。

うちつけに、また來む秋の今宵まで、



月ゆゑ惜しくなる命かな。

愛著は迷なり。この雲を去らざれば、眞如の月は明かなり難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず、これを以て窗前日夜の友とす。清淡虚無、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し、來往自在、ここに疑懼の境も去つて、安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るる花もあらじ、

安く待ちつつ今日もくらさむ。

雲にただ今宵の月をまかせてむ、

厭ふとしても晴れぬものゆゑ。

西行の信仰は、これを佛徒として見ば、なほ或は差別の見を脱する能はざる小安心に過ぎざらむ。しかも世を擧げて、剪綵の末技に汲汲たるとき、巍然として衆俗を抜いて立ち、直に天然に接觸して、感ずる所即ち歌となれり。その歌は企てて成すものにあらずして、自ら成れるなり。その自然にして平易に、殆ど斧鑿の痕を存せざるはそれが爲なり。

ながむるに慰むことはなけれども、

月を友にてあかすころかな。

今よりは昔がたりは心せむ、

怪しきまでに袖しをれけり。

要するに西行はうまれながらの歌よみにして、歌を作る



ものに非ず。天籁吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易率直を旨とすれども、風淒じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。(藤岡東圃—國文學全史)

\*Inspiration

一一一 靈感<sup>インスピレーション</sup>上

人は常に我が胷中の祕密を語らむとす。或は語らむと欲してこれを語る者あり、或は語る事なからむと欲して語る者あり。有心無心の差別はあれども、胷中の祕密は決して長く胷中に隱伏するものにはあらず、口に顯れざれば舉動に

顯れ、舉動に顯れざれば容貌に顯る。

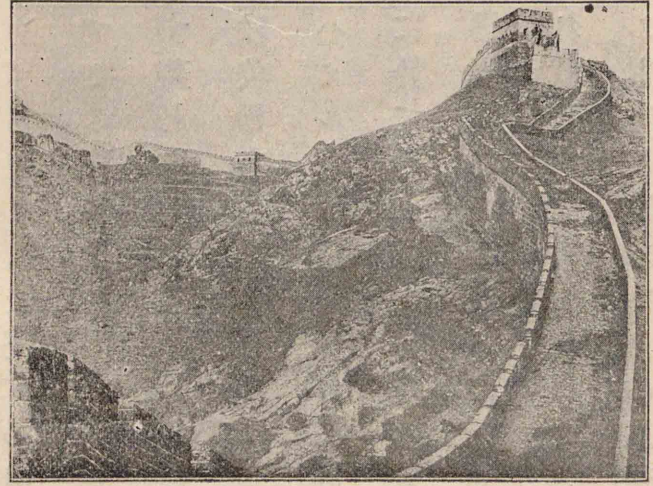
蓋し人の有する四肢・五官は、總てこれ心中の祕密を顯す廣告者なり、吹聴者なり。如何に口に樂しと言ふとも、額に皺の寄る、我その憂あるを知る。如何に無頓著なる風をなすとも、頬に笑靨の立つ、我その樂しみあるを知る。或は溜息となり、或は苦笑となり、或は赤面し、或は青筋を立つ。これ豈に爲にする事ありてなさむや。その胷中の祕密は、自ら抑へむと欲して抑ふる能はず、直に此等の機關を透して自ら顯れ出でたるのみ。思を陳ぶる、何ぞ必ずしも三寸の舌のみならむや、情を敘づる、何ぞ唯一枝の筆のみならむや。總て眼に閃き、顔に映じ、手に動き、體に發する者、皆これ我が深微なる幽懷



- (一) 平安朝の畫家。(一五〇〇年代)
- (二) 南宋の畫僧。(一五〇〇年代)
- (三) Michelangelo. (1475—1564) 伊太利の彫刻家・畫家。
- (四) St. Peter. 羅馬の寺院。
- (五) Milton. (1608—1674) 英國の詩人。
- (六) 字は子美、唐の詩人。(一三七〇—一四〇〇)

を述ぶる一の文章と謂はざるべからず。音にこれのみならず、繪畫彫刻・建築・音樂・詩歌・文章・宗教の如き、皆これ人心の反應たるに過ぎず。例せば巨勢金岡の「風雷神の圖」に於ける、牧谿が「洞庭秋月の圖」に於ける、ミケランジェロがセントペテル寺の壁畫に於ける、豈に必ずしも己が胷中を白狀せむが爲に之を畫きたるものならむや。然れども彼等が筆を執り、刷毛を揮ひ、繪具を紙若しくは布に接する時には、己が胷中に有るもの、直に自家の胷臆を排してこの畫中に映出せしなり。風雷神の英姿颯爽たる、洞庭秋月の神韻縹緲たる、セントペテル寺の壁畫の莊嚴雄麗なる、これ先づ彼等の胷中に風雷神あり、洞庭あり、上帝あり、而して

- (七) 元朝初期の小説家。(一三〇〇年代の末)
- (八) Victor Hugo. (1802—1885) 佛國の詩人。
- (九) Beethoven. (1770—1827) 獨逸の作曲家。
- (一〇) Wagner. (1813—1883) 獨逸の樂曲作家。
- (一一) Moscow. 露國の第二の都。



城長の里萬

心に充ち、手に溢れて、遂にかくの如き絶妙の畫圖を生ずるに至りしなり。豈に唯これのみならむや、ミルトンの「失樂園」に於ける、杜甫の「蜀中の詩」に於ける、施耐庵が「水滸傳」に於ける、ユーゴーが「噫、無情」に於ける、ベトローヴェン・ワグネルが音樂に於ける、或は奈良の大佛の如き、或はモスコイの大鐘の如き、或は埃及のピラミッドの如き、或は萬里の長城の如き、その事物の偉大絶



倫なるにも拘らず、總てこれ人の胷中より生じたる幻影に過ぎざるなり。人ただ其の現象の偉大絶倫なるに驚歎して、卻てこの現象を生じたる人の心の更に偉大絶倫なるを知らず。蓋し偉大なる事物は偉大なる心より生じ、美妙なる現象は美妙なる心より生ず。

\* Hamilton.  
(1788-1856)  
者。英國の哲學

\* ハミルトン曰く、世界に於て人より大いなるものは無く、人に於て心より大いなるものは無し」と。吾人實にその然るを信ず。而してこの心にして、又突如として、我自ら我たるを忘れ、我自ら我より超越するに至ることあり。これを「靈感」と云ふ。靈感とは即ち人の思想感情の高潮にして、凡そ世の英雄・豪傑・孝子・烈婦・忠臣・義士・熱心なる宗教家・美術家・冒險者の

如き人人が、人を驚かし、世界を驚かすの事業を爲すや、必ずこの時にあらざるはなし。唯この靈感の爲に鼓動せられたる數分時の行爲は、器械的に働きたる幾年月の行爲に勝るは、吾人が常に信ずる所なり。史記の李將軍列傳に曰く、廣出獵、見草中石、以爲虎射之、中石、斃鏃。視之石也。因復更射之、終不能復入石矣。と。蓋し石に中りて鏃を没するは、李將軍が平生の伎倆にあらず。乃ちこの雷光一揮、羽箭空を飛ぶの間に、以て靈感の働を察すべきなれ。

一三 靈感下



靈感の大いなる力は、殊に品性の上に顯る。世の平凡なる歴史家若しくは傳記家の如きは、往往「英雄人を籠絡す」と云ひ、而してその籠絡は斯くの如き手段、斯くの如き工夫にて爲せりとて、さも誇り氣に述べたつ。然れども試に彼等に問ふ可し。若し斯くの如き術にて出來得べきことならば、一たびその術を傳習するに於ては、恰も大工の術を學べば大工となるが如く、鍛冶屋の術を學べば鍛冶屋となるが如く、籠絡の術を學べば英雄となること容易なるべきか。殊に夫子自らは斯く英雄の祕術をさへ評き出したる人なれば、自らこれを行ひて英雄たるは容易なるべき筈なるに、彼等は英雄の伎倆を見抜き、その伎倆の存する所を解剖しながら、自

(一) 清の學者・政事家。(三六二—三六三)  
 (二) 字は玄徳、蜀主。(八一—八三)  
 (三) 諸葛孔明。(八四—八五)  
 (四) 字は仲謀、吳主。(八四—八五)  
 (五) 字は孟徳、魏主。(八五—八六)  
 (六) Cæsar. (B.C.100—44) 羅馬の政事家。  
 (七) Cromwell. (159—1658) 英吉利の政事家。  
 (八) Gladstone. (1809—1898) 英吉利の政事家。

ら英雄の事を行ひ英雄たる能はざるは何ぞや。知るべし、英雄人を籠絡すと云ふが如きは決して智術に依るに非ず、即ち言ふに言はれぬ靈感のありて、その人に接するや、電氣の物に觸るるが如く、磁氣の物を吸ふが如く、離れむとするも離るる能はざらしむることを。趙翼嘗て二十二史劄記に於て劉備を論じて曰く、

至託孤於亮曰、嗣子可輔、輔之、不可輔、則君自取之。千載之下猶見其肝膈本懷。豈非眞性情之流露。

と。豈に獨り劉備のみならむや、孫權と雖も、曹操と雖も、若しくはケイザルと雖も、クロンウエルと雖も、グラッドストーンと雖も、皆然らざるは無し。これを要するに、かの傍人が英雄



(一) 韓退之。(一三三)  
(二) 柳宗元。(一四三)  
(三) 蘇東坡の弟。字は子由。(一五九)  
(四) 蘇轍が、

の行爲に就きて種種器械的の評論を試みるは、恰も下等なる批評家が文章軌範の評釋を爲すが如く、漫に自家の智臆を以て彼此の批評を爲し、恰も韓<sup>(一)</sup>柳<sup>(二)</sup>の諸名家は定規を以て文章を作りたるかの如く、雙關法と云ひ、抑揚頓挫の法と云ひ、波瀾擒縱の法と云ふ。焉んぞ知らむ、皆これ後人の牽強附會に過ぎざるを。彼等豈に始より斯くの如き法に據りて文を作らむや。即ち蘇轍<sup>(三)</sup>が、

豈嘗執筆學爲如此之文哉。其氣充乎其中而溢乎其貌。動乎其言而見乎其文。而不自知也。

といへる類なるのみ。靈感の繪畫に顯るるときには、繪畫我を顯すに非ず、我即ち繪畫に顯るるなり。文章に於ても亦然

(四) Esop. 西曆前六世紀のギリシヤ人なりといふ。

り。我の思想を寫し出すに非ず、我即ち文章に顯るるなり、我が生命即ち文章に顯るるなり。例せば伊蘇普<sup>(四)</sup>の譬喩の如く、或は獅子となり、或は狐となり、或は狼となり、或は鼠となり、その顯るる所千變萬化すと雖も、要するに一の圓滿美妙なる伊蘇普の智慧自らこの間に發揮するのみ。吾人はこれを讀んで、その狼たると狐たるとを見ず、唯一の伊蘇普たるを見るのみ。

蓋し靈感は神力なり、哲理的に、數理的に、科學的に分解説明する能はざる不可思議力なり。哲學者は世の中の不可思議力を退治せむと心掛け、中には大早計にも、最早世間には不可思議力は無しなど言ふ人すら出て來れり。然れども不



可思議の領地は未だ容易に縮まるを見ず。勿論鬼神と思ひたる雷電も、今は之を使役し、神怒と思ひたる地震も地中の火力作用なりと解説し、斯くの如く、理學の進歩と共に、多少世の所謂不思議なる物は除去せられたるが如しと雖も、その實は決して然ることなし。即ち人とは如何なるものか、何處より來れるか、何くに行くか、疑問茲に到らば、人、彼自身も亦一の解釋する能はざる問題と言はざるを得ざるべし。人にして斯くの如しとせば、この人が不可思議力に支配せらるるも、亦何ぞ深く疑ふを須ひむや。蓋し靈感は神力なり。我自ら我より超越し、人自ら人より超越し、人間にあつて天使に類する行をなすが如きは、皆この靈感に本づく者なり。

\* Jeanne d'Arc.  
(1412—1431)

佛國の女傑。

然らば靈感を養ふ道ありや。靈感の來る恰も風の如し、人これを捕ふる能はず。然りと雖も若しこれを得る道ありとせば、吾人はただ一あるを知るのみ。曰く、純一これなり。これを詳言すれば、脇目も振らず、忠純專一、一所懸命に働くことこれなり。吾人嘗てユーゴの語を聞く。曰く、婦人は弱し、然れども母は強しと。弱き婦人も、母となれば強きは何が故ぞ。唯その幼兒を愛する一念は、弱き婦人をして勇氣を生ぜしむるにあらずや。至誠は神明に通ず。凡そ人眞面目になり、純一になり、一所懸命になる時に於ては、弱き人も強く、愚なる人も智に、無用の人も有用となるなり。即ち火事場に於て主婦が俄かに力を生じて、箆笥を持運ぶが如き、<sup>\*</sup>ジョアン嬢が



佛國田舎の一女子を以て、英國の大軍を退けたるが如きは、ただ之あるが爲のみ。(徳富蘇峯「靜思餘録」に據る)

一四 尺牘の秘訣

貴翰拜讀、書簡認め方の心得御尋ねに預り候處、別にこれと申す稽古致候事も無之候へども、幼少より遠國に友人多きと、日常の繁忙なるにより、多少會得致候處も御座候間、左に大要を認め差上げ申候。御閑暇の折、御覽被成候はば、幾分か御裨益可有之と被存候。

凡そ文字の要は、讀者に筆者と同じやうなる思をなさしめ候にあり。との一言に、能く能く御注意可然被存

候。故に文格・結構・用語等、皆相手の貴賤・年齢・地位・人物の品に従ひ御起筆肝要に候。元來書簡は山川萬里を隔て、言語を交ふる事の成らざる場合、又は事故ありて相見する能はざる時に遣すもの故、恰も其の人に接する心持にて御認め相成り候はば、千里如面、達意の文字も出來可申。是尺牘の秘訣に御座候。即ち長上・貴顯に面し候時は、先づ以て時令の挨拶致し、起居を問ひ、久闊の缺禮を謝し、扱用向を語るは御承知の通りに有之、書簡にても別に異なる事も無之、貴人に宛つる文書は文格・結構・用語等も随分鄭重に、謙遜して可認、併し昵近の友人なれば、突然と用向のみ認め遣すも差支なかるべく、貴賤親



疏とも、其の交際如何に由り御斟酌可被成候。乍去言語と違ひ、文書は後に残り候ものゆゑ、十分の御注意有之度、且つ古來の慣習にて、文字は言語より餘程丁寧に認め來り候間、日常往復の手紙等一一御吟味被成候はば、追追御會得可相成候。

とにかく手簡は其の宛名の人に送り候もの故、其の人次第にて如何様にも御認め可被成、最も謹むべきは、英語を知らざる人に英語を交へ、雅言に耳遠き人に雅言を用ひ候事にて、第一輕蔑の意と相聞え、忽ち其の人の怒に觸れ候ものに候。歌人にあらざれば歌物語御無用たるべく、要談の時は決して雜談を混淆すべからず。

文書も亦然り。假令懇親の閒柄たりとも、用事の文書は其の用向のみを御認め被成候事、古來よりの教にて候。若し用向の外に申し遣し度事有之候はば、別紙若しくは追而書に御認め可被成候。

我が國民が始めて文字を知りし以降、書簡の沿革を稽ふるに、王代は多く漢文を用ひ、それより追追日本化して、鎌倉・足利の世には、消息往來の如き一種不思議の鶴文となり果てたる様に相考へ申候。乍併これは用語・熟字等に變化を生じ候のみにて、其の中、名文も尠なからず、諸物語又は古狀揃杯と申す書御涉獵相成り候はば、御了解可相成、畢竟名文と申すは簡にして明かなる



ものを指し候事なれば、先づ以て其の手紙の趣意を能く考へ候上、結構用語に及び候ものと御心得可被成、とかく文章の主眼を何處迄も押立て、文意貫徹の御工夫緊要に候。先年、福澤先生「文字の教」と申す書を著され候時、佶屈聱牙なる熟字を羅列せし無心の手紙を掲げ、是天下の拙陋文字と評せられし事有之、誠に尤もなる教と存候。されば文字・言語は如何に賤劣なりとも、達意の名文なきにあらず。昔、龜といへる仙臺の伯勞、馬の代價の事につき果状をつけたる事あり。希代の名文なりとて、其の頃諸大家の評ありし事を思ひ出し申候。引證のため茲に掲げ申候。

一金三兩

但し馬代

右馬代、くすかくさぬかこれやどうぢや。くすといふならそれでよし、くさぬといふならおれがゆく。おれがゆくならただおかぬ。かめのうてにはほねがある。此の一見拙劣なるが如き文章を、よくよく玩味し來れば、文格嚴正、言語精勵、しかも結末の一句は所謂「斷じて行へば鬼神も爲に避く」と云ふべき氣魄ある大文字なり。細かに之を評すれば、第一段冒頭に「金三兩」と要求する所の標目を掲げ來り、但し馬代」と斷り、「右馬代」と重疊法を用ひ、さて照會の要點たる「呉れるか呉れぬか」と、先方の意志の明示を促し、「これやどうぢや」と一喝して念



を押し、くすといふならそれでよし」と頓挫法を挿み、而して更に「くさぬといふならおれがゆく」と、斷然たる決意を示し、「おれがゆくならただおかぬ」と、奮然決闘要求の旨を通じ、最後に「龜の腕には骨がある」と、猛虎齒牙の勢を描き出す。何等の名文、何等の傑作。蓋し賤夫偶然の作なるべしと雖も、文章の上より評し去れば、一世の大文字たり。如何なる名家も之に駕するの文字を作る能はざるべく、實に一代奇傑の名文とも可申候。老生故らにかくの如き文章を掲出せしは、初學の徒、徒に難澀なる熟字を覺ゆるや、頻にこれを試みむと欲し、妥當なりや、適切なりやを顧みずして、強ひて之を用ひ、終に文意

の暢達を妨ぐる弊あればにて候。之は能く能く御注意有之度事に候。

天保の末年、市河米庵と申す書家、所藏の手書類數百通を上梓いたし候事有之。老生も一部を藏しをり候。此の書、名家手簡と申す標題にて、三百年來の諸名家の手書を集め、一部二十冊有之、御一覽然るべく被存候。手書は可成短文にて、所謂筆短情長と申す如く、餘韻ある様に認め度、露骨に諄諄と言盡し候は甚だ野鄙に見え候ものに御座候。餘韻ある様に認め候には、和歌・詩文の素養なくては協はず候。しかし此の忙しき時節にさる學問を致候暇も無之候間、只平生御心懸被成候はば、和歌



も詩文も多少御語記可相成、千首二千首の記憶尙大いに文章の助となり可申候。併し餘韻の文章と申すも畢竟相手次第なるべく候。

文字は読みえ候はば事足り可申候。假令鍾<sup>〇〇</sup>王<sup>〇〇</sup>の書たりとも、讀みがたければ何の役にも立ち不申、即ち項羽が「書は姓名を記すに足る」と申候も此の事なるべし。然るに其の項羽が當代の能書なるには呆れ申候。和漢共に名ある人は皆それぞれ書を能く致候。日本の武將にても、頼朝・義經は強きのみにては無之、頼朝の尺牘・杯御一覽被成候はば、古人も手蹟を輕輕に附し去らざりし事御合點參るべく、何程名人にても、拙筆にては、未だ見

鍾<sup>〇〇</sup>。三國の人。  
王<sup>〇〇</sup>。晉の人。

ざるに其の人の風采も想像せられ候ものにて候。暇あらば法帖類をも御覗き可被成候。

入組みたる事柄、又は議論に涉り候文章は、最初に序次・論理を考へ、腹稿成り候上、思ふ通りを俗語にて假名を以て認め、扱通俗文に直し候へば、案外手軽く書き得るものに候。かくて成るたけ無用の文字を删除し、極めて簡明なるものとなし、其の上にて修辭の洗煉を心懸くべきにて候。是書簡を書習ふ捷徑に御座候。兔角初學の中は簡明を宗と御心懸なされ候事、肝要に候。尙文章は學問の八分目を御用ひ可被成、十分に用ひ盡し候は見苦しきものにて候。不乙。(富永冬樹)



一五 徒然草抄

一 折節のうつりかはり

折節のうつりかはりこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひときは心もうきたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえ出づる頃より、やや春ふかく霞み渡りて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつづきて、心あわただしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにただ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれな

春はただ花のひとへに咲くばかり、物のあはれは秋ぞ優れる。  
〔拾遺集、讀人知らず〕

五月待つ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする。  
〔古今集、讀人知らず〕

色よりも香こそあはれと思ほゆれ、たが袖ふれし宿の梅ども。  
〔古今集、讀人知らず〕

賀茂の葵祭。

ほ梅のにほひにぞ、古の事もたちかへりこひしう思ひ出でらるる。山吹のきよげに藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。  
「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされ」と、人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたたくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稻田かりほすなど、とりあつめたる事は、秋のみぞ多かる。また野分のあした



こそをかしけれ。

ふる百葉の散りよまじけり  
 ぼも雨にぬる  
 ろのふれきりのかたむらり  
 しつと社のいよまじけり

吉田兼好筆蹟

さて冬  
 枯の景色  
 こそ秋に  
 はをさを  
 さ劣るま

十二月十九日よ  
 り三日間、佛名  
 を唱ふる公事。  
 御陵と功臣の墓  
 とに幣帛を奉る  
 敬使。

じけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うおける  
 あした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて  
 人ごとにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき  
 物にして見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの  
 空こそ心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞ、あはれ

十二月晦日の夜  
 に、悪鬼を追ふ  
 公事なり。  
 元旦寅の時に、  
 天皇、四方及び  
 山陵を拜し給ふ  
 儀式。

にやむごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさね  
 てもよほし行はるるさまぞいみじきや。

追儼より四方拜につづくこそおもしろけれ。つごもりの  
 夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで人の門た  
 たき走りありきて、何事にかあらむことごとしくののしり  
 て、足を空にまどふが、暁がたよりさすがに音なくなりぬる  
 こそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわ  
 ざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほする事にて  
 ありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき  
 のふにかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地  
 ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに、うれしげなる



こそまたあはれなれ。

二 猫また

「奥山に猫またといふものありて人を食ふなる」と人のいひけるに、山ならねども、これらにも猫のへあがりて猫またになりて、人取る事はあなるものをといふ者ありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の行願寺の邊りに在りけるが聞きて、獨りありかむ身は心すべき事にこそと思ひける頃しも、或處にて夜ふくるまで連歌して、唯ひとり歸りけるに、小川のはたにて、おとにききし猫また、あやまたず、足もとへふと寄りきて、やがてかきつくままに頸のほどを食はむとす。きも心もうせて、ふせがむとするに力もなく、足もた

京都一條賀茂神社の附近にありき。

たず、小川へころび入りて、たすけよや、ねこまた、よや、よや」とさけば、家家より、松どもともして走りよりて見れば、このわたりに見しれる僧なり。こはいかにとて、河の中よりいだき起したれば、連歌のかけ物とりて、扇、小箱などふところを持ちたりけるも、水にいりぬ。希有にして、たすかりたるさまにて、はふはふ家に入り、にけり。飼ひける犬の、くらけれど、主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

三 聖海上人

丹波に出雲といふ處あり。大社を遷して、めでたく造れり。志太のなにかしとかや、知る處なれば、秋の頃、聖海上人、その外も人数多誘ひて、いざ給へ、出雲をかみに、かいもちひめさ

南桑田郡大社。出雲大社。



む」とて具しもていきたるに、各拜みて、ゆゆしく信を起したり。御前なる獅子狛犬背きてうしろ様に立ちたりければ、上人、いみじく感じて、あなめでたや、この獅子の立ちやう、いと珍し、深き故あらむと、涙ぐみて、いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じ咎めずや、無下なり」といへば、各怪しみて、「まことに、他に異なりけり。都のつとに語らむ」などいふに、上人、猶ゆかしがりて、大人しく、物識りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習ある事に侍らむ。ちと承らばや」といはれければ、「その事に候。さがなきわらはべども、の仕りける、奇怪に候ことなり」とて、さし寄りて、据ゑなほして去にければ、上人の感涙、いたづらになりけり。

四 人の心

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されどおのづから正直の人などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て、羨むは世の常なり。至りて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見て、これを憎む。おほきなる利を得むが爲に、少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てむとす。とそしる。おのれが心にたがへるによりて、このあざけりをなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、いつはりて小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて、大路を走らば、則ち狂人なり。悪人のまねとて、人を殺さば、悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の



徒なり。偽りても賢を學ばむを賢といふべし。

五 花と月

(一) たれこめて春の  
ゆくへも知らぬ  
まに、待ちし機  
もうつろひにけ  
り。古今集、藤  
原因香

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれ籠めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべき程の梢散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、花見にまかりけるにはやく散りすぎにければ」とも、障る事ありてまからで」など書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは、花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、この枝かの枝散りにけり、今は見所なし」などはいふめる。よろづの事は始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外ま

て眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、ところあらむ友もがなと、都こひしうおほゆれ。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家をたち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。(吉田兼好「徒然草」)

(二) この文は元弘元年(一九〇七月藤原俊基卿が東下りの條なり。

一六 落花の雪



(二) 又や見む交野の  
み野の櫻狩、花  
のゆきちる春の  
曙。新古今集、  
藤原俊成)  
(三) 朝まだき嵐の山  
の寒ければ、紅  
葉の錦著ぬ人ぞ  
なき。(拾遺集、  
藤原公任)

(三) 近江國蒲生郡。  
又蒲生野ともい  
ふ。近江より朝  
立ちくれば、う  
ねの野にたづぞ  
なくなる。あけ  
ぬこの夜は。(古  
今集、讀人知ら  
ず)  
(四) 白露も時雨もい  
たくもる山は、  
下葉残らず色づ  
きにけり。(古今  
集、紀貫之)

落花の雪にふみ迷ふ交野の春の櫻がり紅葉の錦著て歸  
る嵐の山の秋の暮一夜をあかす程だにも旅寝となれば物  
うきに恩愛のちぎり浅からぬわが古里の妻子をばゆくへ  
も知らずおもひ置き年久しくも住みなれし九重の帝都を  
ば今を限とかへりみて思はぬ旅に出て給ふ心のうちぞあ  
はれなる。

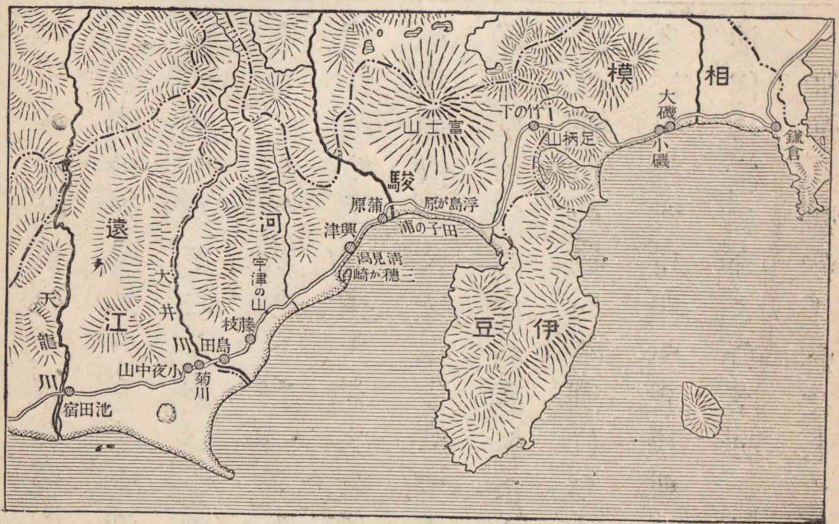
憂きをばとめぬ逢阪の關の清水に袖沾れて末は山路を  
うち出の濱沖を遙かに見渡せば潮ならぬ海にこがれ行く  
身をうき舟の浮き沈み駒もとどろと蹈みならず勢多の長  
橋うち渡り行きかふ人にあふみ路や世をうねの野に鳴く  
たづも子を思ふかとあはれなり時雨もいたくもる山の木

(五) さよ千鳥聲こそ  
近くなるみ潟、  
傾く月に汐やみ  
つらむ。(新古今  
集、藤原季能)

の下露に袖ぬれて風に露ちる篠原や篠わくる道を過ぎゆ  
けば鏡の山はありとても涙にくもりて見え分かず物をお  
もへば夜のまにもおいその森の下草に駒を駐めてかへり  
みる故郷を雲やへだつらむ番場醒が井柏原不破の關屋は  
荒れはててなほもるものは秋の月いつかわが身のをはり  
なる熱田の八つるぎ伏拜み潮干にいまやなるみ潟傾く月  
に道見えて明けぬ暮れぬと行く道の末はいづこととほた  
ふみ濱名の橋の夕潮にひく人もなき捨小舟沈み果てぬる  
身にしあれば誰かあはれとゆふ暮の人相なれば今はとて  
池田の宿に著きたまふ。  
旅館の燈かすかにして雞鳴曉を催せば匹馬風にいばえ



年をへてまた越  
ゆべしと思ひき  
や・命なりけり  
小夜の中山。

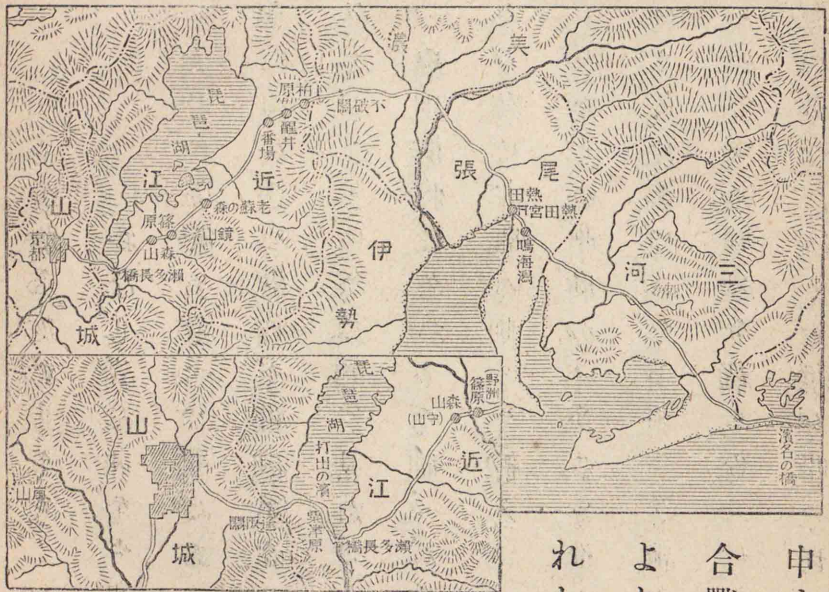


て、天龍川をうち渡り、小夜の中  
山越えゆけば、白雲道を埋み來  
て、そことも知らぬ夕暮に、家郷  
の天を望みても、昔西行法師が  
「命なりけり」と詠じつつ、再び越  
えし跡までも、羨ましくぞ思は  
れける。隙ゆく駒の足はやみ、日  
已に亭午に上れば、餉進らする  
程とて、輿を前庭に昇きとどむ。  
轅を敲きて警固の武士を近づ  
け、宿の名を問ひ給ふに、「菊河と

承久三年。(一六)

(一八三十一一八)

支那南陽縣の故  
事。上流に菊あ  
りて、その滴り  
流に落ち、これ  
を飲めば長壽を  
得といふ。



申すなり」と答へければ、承久の  
合戦の時、院宣書きたりし答に  
よりて、光親卿關東へ召し下さ  
れしが、この宿にて誅せられし  
時、昔南陽縣菊水、汲下流而  
延齡。今東海道菊河、宿西岸  
而終命」と書きたりし、遠き  
昔の筆の跡、今はわが身の  
上になり、あはれやいとど  
勝りけむ、一首の歌を詠じ  
て、宿の柱にぞ書かれける。



(五)山城國葛野郡嵯峨なる龜山の離宮。

古もかかるためしをきく河の

おなじ流に身をや沈めむ。

(二)伊勢物語の主人公或はその著者なりといふ。(四)五十一頁(五)駿河なるうつの山べのうつつにも、夢にも人にあはぬなりけり。(伊勢物語)

大井川を過ぎ給へば都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭、鷓首の舟に乗り、詩歌、管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夢となりぬと思ひつづけ給ふ。鳥田、藤枝にかかりて、岡べの眞葛うら枯れて、ものがなしき夕暮に、宇都の山べを越えゆけば、蔦、楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將の、すみかを求むとて、東の方へ下りしに、夢にも人にあはぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひしられたり。清見瀉を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興

(三)清見瀉浦風寒き夜な夜なは、夢もゆるさぬ波の關守。新後撰集、院大納言典侍、富士の根の煙はなほも立ちのぼる、上なきものは思なりけり。(新古今集、藤原家隆)

津浦原うちすぎで、富士の高嶺を見給へば、雪の中よりたつ煙、上なき思にくらべつつ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や浅き舟浮けて、おり立つ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。(太平記)

### 一七 吉野朝廷時代の文學

(五)吉野朝廷時代五十年、さしもに兵馬倥傯の世なりしかど、文學史上には頗る注目すべき作物の残りたるのみならず、

(五)九六一(三)五



奈良・叡山

これを室町時代の文學に比すれば、多少の特色なきにしもあらず。蓋しこの時代にあつては、學問の素養ある者は、多くは京都の搢紳か、さらずば南都・北嶺の僧侶にして、多少保守的趣味を有し、且つ大抵吉野の朝廷に心をよせたり。而して當代の文學は又多くそれ等の人人の手に成れり。

北畠親房の神皇正統記が、専ら南方が正統の天子にましますことを論證せむが爲に記されたることは、今更にいふまでもなかるべし。小島法師といふ人によりて書かれたりといふ太平記は「義貞謀叛」といふが如き文字をも用ひたれども、その記事に於ては、なほ常に南方に同情し、楠公父子の誠忠の如きに至りては、力を極めてこれを贊歎せり。徒然草

〔三〕

〔四〕

の著者兼好法師は、塵世を外にして花月の風流に逍遙せし人にて、必ずしも南方の忠臣とは稱し難きに似たれど、園大曆や吉野拾遺によれば、吉野にまゐりて加持祈禱などの仰を蒙りし事あり。亦或は南方に志ありしものか。以上の外、吉野拾遺は、後醍醐天皇の侍從にして、崩御後にも御陵の側に庵したりといふ松翁の著にして、新葉集は宗良親王の御撰なり。當代の名高き文學にして、全く吉野朝廷に關係なき人の手に成りしは、僧頼阿の草庵集と二條良基等の撰びし菟玖波集とあるのみ。

吉野朝廷の忠臣の手に成りしものは、その尊王の至誠惻惻として人を動かさざるはなし。なかにも、正統記の議論の

〔四〕 弘和元年成る。  
〔五〕 後醍醐天皇の皇子弘和(1331—1333)中薨す。



正大にして明快なる、史論としては我が國有數の名作なれど、これを文藝の上より見れば、最も注意すべきは太平記と徒然草となるべし。

○太平記は、小島法師の歿年なる文中三年迄に一度完成したりしものなれども、後、室町時代を経て多少改竄・増補せられしものなるべく、流布本の外にも、異本の傳はれるもの一二のみならず、文章にも異同頗る多し。これを鎌倉期の戦記に比すれば、文體槩して浮華・誇張に過ぎて、事實の真相を逸したりと見ゆるものありと雖も、亦戦記中の一大雄篇と言ふべく、その壯大・豊麗の調は古今相如くもの稀なり。徒然草は佛教の厭世主義と老莊の虚無の説とを交へたれば、その

思想より見れば、悉く有爲なる青年の景仰に値すと言ふべからず。されどその詞藻の豊富にして文章の縦横自在なる、敘事に、抒情に、議論文に、交、和漢混淆體の長所を發揮し盡したるの感あり。その優美なるものは殆ど源氏物語を讀むが如く、その勁健なるものは戦記文に過ぎて、しかも又洒脱・輕妙なる趣をも具へたり。されば元和偃武以後、文藝復興の曙光に逢ふや、和學者も、俳諧師も、小説家も、漢學者さへも、争つてこれを愛讀せしかば、その注釋の書の刊行せらるること、殆ど源氏物語をも凌がむとせり。

思ふに兼好も亦京都の人にして、かの和歌とともに傳來したる優美なる平安朝文化を慕ひて、この美<sup>麗</sup>き趣味が東

\*  
卜部氏にして洛  
東吉田に生る。



國の田舎武士によりて蹂躪せらるることを歎くこと殊に切なりけむ。その一切の文物・制度より、風俗・言語の末に至るまで、偏に保守尙古の傾向あるはこれが爲なるべく、而してこれ亦當代の歌人・文人に共通せる一特色なり。

兼好の親友に僧頓阿あり。嘗て北朝の命により、當代の碩學(三)二條良基と計つて歌道の復古を企て、良基との問答を記して愚問賢注を著す。その歌集を草庵集と云ふ。蓋し當代歌人の雄にして、兼好とともに平安朝趣味を守りたる殿將といふべし。

頓阿が復古の企は終に成らざりき。良基もこれに絶望して、僧救濟を師として連歌に遊びぬ。(三)延文二年、連歌の最初の

(一四九—一五三)  
(一五〇—一五二)

(三)  
正平十二年。(一〇)  
(一)

撰集なる菟玖波集成る。歌道益、廢れて、連歌日に盛なるものはこの時代末期の大勢なり。

連歌は和歌の通俗化したるものなり。通俗なる連歌はよく室町期文藝の特色を代表せり。敗者たりし京都人士は已に文藝を弄ぶ餘裕を有せず、新に政權を得たる田舎武士は、和歌を詠ぜむよりは連歌を好み、物語や草子を繕かむよりは、役者の演藝を見むことを欲しぬ。謠曲・狂言ここに於てか盛なり。かの天下の擾亂に關係せざりし下層の民は、亦固より高尚なる古語・雅語に通ずべくもあらず。ここに於てか講談に似たる太平記讀や淨瑠璃十二段草子の如き語りもの起り、極めて卑俗なるお伽草子の類日に流行せり。その末期



に至つては、狂歌俳諧・笑話・歌舞伎の類さへ勃興せむとせし  
を見れば、室町文藝には、吉野朝廷時代の保守的傾向跡を絶  
ちて、所謂平民文學の萌芽既に發生したりしなり。

一八 寛成親王鷹狩の事

後村上天皇の皇太子、長慶天皇。  
大和國吉野郡國樺村字菜摘の附近にて、吉野川を菜摘川と呼ぶ。  
藤原氏。後村上天皇に仕へ大納言に任ぜらる。

寛成の親王の未だをさなうおはしける時に、若き殿上人  
あまた伴はせ給ひて、菜摘の川の川淀の邊りにて鷹つかは  
せて御覽ありけるに、いと大きな巖のえもいはずおもし  
ろきに、小松の生ひいでたるありけり。親王御覽じさせて、「こ  
の巖を、歸りなむ時皇居の御庭にもてまゐれ。上に奉らむ」と、  
實爲の中將に宣はせければ、幼き御心を推しはかりて、御こ

と受けせさせ給ふ。

鳥などあまた取らせ給ひて、歸らせ給へる時に、忠行の侍  
從に「巖をな忘れ給ひそ」と宣はせければ、民部大輔が力も強  
く侍れば、御後より持て參り侍ふなり」と啓し給ふ。皇居に入  
らせ給ひて、御鷹の鳥など奉らせ給ひて、實爲の中將に、「あり  
つる巖を」と召させ給ひけるに、「忠行の侍從の仰せごとを承  
りぬ」と啓し給へば、侍從を召して、「如何に」と尋ねさせけるに、  
また、民部大輔の御あとより「など申し給へば、親王むづから  
せ給ひて、中將にこそよく言ひつれ。などさはいふにか」とし  
をらせたまひければ、中將のありつる事を上に奏し給ふに、  
をかしがらせ給ひて、「誠に面白からむ巖こそ見まくほしけ



れ、民部が力こそゆゆしければ、持て來なむに、召させ給へ」と宣はするに、中將立ちたまひて、民部大輔に、「かかる事なむある。如何してむ」とのたまへば、「すべき事こそあるなれ」とて、御庭にありける小さき巖に松の枝を取りつけて、中將といと重げに持ちて、宮の御前に据ゑ奉れば、「小さくこそあれ、それにはあらじ」と、なほむづからせ給ひければ、民部大輔、「さればこそ、その巖を持ちて上の山を通り候ひしに、左右より山のさし出でて道のいと狭き處にて、かなひ難く、如何にせましとただよひ侍りしに、向ひの方より山伏の來りけるが、巖にせかれて通られぬにこそ、のけ給へ」とののしりける程に、「我もせむ方なさにかくて侍り、如何にせまし」とわびあへるに、

さらばすべき事こそあれ」とて、數珠をおしもみ、何やらむつぶやきて祈るに隨ひて、この岩小さくなりて、やすやすと通りて候ひし程に、山伏も行過ぎしを、呼返して、「もとの如く祈りなほしてよ」と言ひければ、「また行くさきに細き道のあらばいかがし給はむ」と言ひし程に、げにもと思ひ侍りて、其のまま持て參りぬ」と申し給へば、上より始めて有りつる人人をかしながらせ給ふに、宮の御氣色もいとよくならせ給ひて、「げにさもあらむことなり。その山伏召返せかし」とのたまはするに、「はや遙かに行過ぎて、いづち行きけむも知らず」と啓し給へば、「本意なきことにこそあれ、留めて、民部大輔の大きなるそら言をすこしきやうに祈らせむものを」と宣はせけ



り。誠に行末たのもしき御事にこそと、いとせめて覺え侍りし。(吉野拾遺)

一九 狂歌

讀人不知

ぬば玉の木の 下闇の黒米も、

つきいでてこそしらげそめけれ。

鯛屋貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ、

路銀も入らず草臥れもせず。

散ればこそいとど櫻はめでたけれ、

永正(三六四—三六八)  
狂歌合に見ゆ。

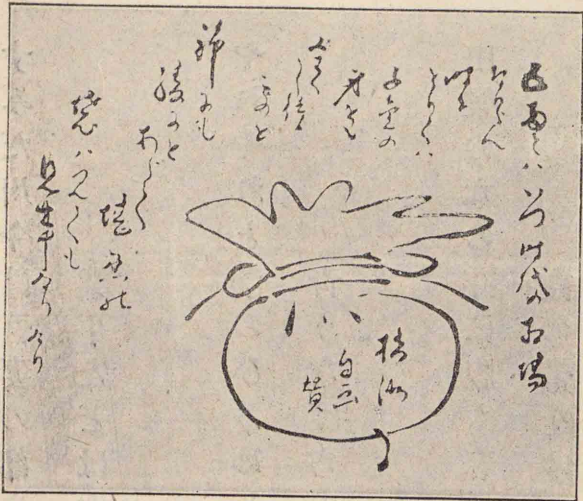
大阪の人。狂歌の一派鯛屋派の祖、又油煙齋と號す。(三三四—三三六)

散ればこそいとど櫻はめでたけれ、憂世に何か久しかるべき。(伊勢物語)

小島氏。(三四三—三四六)

蜀山人。

ほととぎすなきつる方をながむれば、唯有明の月ぞ残れる。(百人一首、後徳大寺左大臣)



唐衣橋洲筆蹟

けれどもけれどもさうぢやけれども。

唐衣橋洲

うつて来る波の

受太刀、滿つ潮の

さし心得て、飛ぶ千鳥哉

限なき君が齡や

うらやまむ、

鶴は千年、龜は萬年。

四方赤良

時鳥啼きつるあとにあきれたる、

後徳大寺のありあけのかほ。



一面の花は碁盤の上野山、

黒門前にかかる白雲。

すみだ川今は吾妻の都鳥、

業平などは在五中將。

朱樂菅江

やれやれと、潮のひるめしいそぐなり、

青うなばらのへるにまかせて。

元 奎網

田樂の木の芽に腹も春の野や、

霞の帯をゆるめてぞ喰ふ。

宿屋飯盛

山崎氏。(三五六—  
三五六)

渡邊氏。(三三三—  
三三三)

石川雅望、又、六  
樹園と號す。(三三  
四三—三三九)

北川氏。又、狂歌  
堂と號す。(三四  
三—三四九)



宿屋飯盛筆蹟

世わたりの道に二つの追分や、

たからの山に借金の山。

鹿都部眞顔

争はぬ風の柳の絲にこそ、

堪忍袋縫ふべかりけれ。

二〇 會津落城上

散士は亡國の遺臣。彈雨砲煙の間に起臥し、生を孤城重圍



の中に偷み、國破れ、家壞れ、窮厄萬狀、辛酸を嘗め盡せり。屈指回顧すれば、二十年前、我が國歐米各邦と開港條約を締盟せしに當つてや、尊王攘夷の說紛として起り、慷慨悲歌の士、幕府の專横を憤り、俗吏の偷安を慨し、一死邦に報いむと、臂を揮ひて呼號す。恨を幕府に抱く、の士、亂を好んで無爲に苦しむの徒、機に乗じて良民を煽動し、公卿を誘惑し、内に深謀遠慮なく、外は宇内の大勢を知らず、徒に螻蛄の斧を以て歐米の兵を攘はむと擬す。或は深夜外館を襲ひ、火を放つて剽掠し、或は白日路上不意に起つて無辜の外客を枉殺し、以て匹夫の勇に誇り、以て神州の恥を雪ぐとなす。兒戲輕佻、怯弱殘暴、言ふに忍びざるものあり。井伊大老は前に斃れ、安藤侯は

(一) 南宋の奸臣。(二七)

(二) 南宋の忠臣。韓世忠。(一三二)

(三) 岳飛。(一三三)

後に傷き、開港を唱ふる者は人目するに秦檜を以てし、鎖國を言ふ者は自ら韓岳(三)に比す。茲に於て外人憤怒し、兵威を以て劫制し、我が海岸に寇し、我が藩籬を亂し、我が國權は彼の殺ぐ所となり、我が威力は彼の凌ぐ所となり、神州の危殆、命脈の絶えざる、一線の千鈞を懸くるが如し。外人の跋扈跳梁、殆ど復、制す可からざるに至れり。而して其の原を尋ぬれば、幕府の失體より起れりと雖も、當時慷慨自ら任ぜし士人の躬親ら招く所のもの亦多きに居る。

當時、我が主君京師を護衛し、先帝(五)の殊遇を蒙り、佐久間象山、横井小楠諸名士の言を納れ、上、攘夷の非計を諫め、下、狂暴の輕舉を戒む。然るに内は朝臣等の攘夷論者に黨するあり、

(四) 會津藩主松平容保。(五) 孝明天皇。



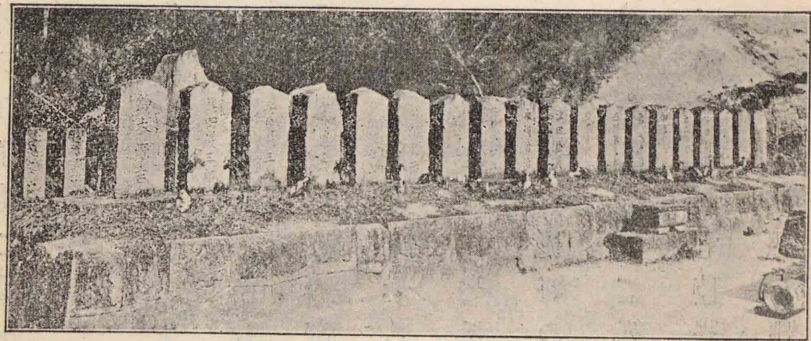
外は各國兵威を恃んで約を責むること秋霜よりも嚴なり。而して幕府は三百年承平の後を受け、政苟且に流れ、兵勢振はず、財政紊れ、大勢已に去り、復、挽回すべからざるに至れり。この國家存亡の秋に當り、豈に毀譽成敗を顧みるに違あらむや。故に我が公、決然、京師を以て墳墓の地と定め、上は公武の軋轢を調和し、下は内亂の禍機を撲滅せむとし、奮つて之に當れるも、臂弱くして、負荷の重きに堪へず。且つ州人勇あれども、謀寡く、剛直にして、變通に暗く、孤忠、公武の間に介立し、事違ひ、志空しく、徒に天下の憫笑する所となる。聞くに勝ふ可けむや。

\*十四代將軍家茂。

偶、先帝崩御し、大樹亦繼いで薨ず。將軍慶喜公、英才を以て

國歩の艱難に當り、侯伯と舊怨を解き、弊政を除き、國權を復し、以て大いに爲す所あらむと欲す。然れども病膏肓に入り、復之を如何ともする能はず。遂に大政は奉還せられ、尋で我が公亦職を失ひ、京師を退くに至れり。而して當時世人卻て我を責むるに、霸府を保庇して、維新の帝業を妨ぐるを以てし、朝廷我を罪するに、禍心を包藏して、帝命に抗するを以てす。哀願途絶え、愁訴計究まり、錦旗東征、大軍我が境を壓す。時に一二兇奸の輩あり、我が家財を掠め、我が婦女を殘し、降人を屠戮して、殆ど王師民を弔するの意を失ふが如し。茲に於て我が君臣皆以爲らく、これ一二雄藩の陽に幼主を擁して、陰に私怨を報ずるのみと。闔國捍禦、春より秋に至る。孤





墓の隊虎白

軍百戦、刀折れ、矢盡き、敵兵遂に城下に迫る。我が將士枕藉死するもの麻の如く、瘡者空拳を揮つて敵兵に抗し、手斷ち、足碎けて地に斃るれども、目を瞋らし、齒を切して、敵兵の進路を遮り、頭足處を異にし、血流れて杵を漂はすに至るも、猶敵に抗するの狀を爲さざるものなし。

當時年少の一隊あり、白虎隊と云ふ。年約十六七、皆良家の子弟なり。此の日初めて陣に臨み、驕勝の兵と戦ひ、衆寡

敵せず、死傷略盡く。餘す所僅かに十六人、奔つて一丘に上り、瘡を裹み、血を歎つて憩ふ。少焉ありて城市、火、四に起り、砲丸櫓樓を焚く。皆以爲らく、城陥り、大事去れりと。乃ち西向再拜して曰く、「今や刀折れ、弦絶し、臣等が事終る。苟も生を偷んで以て君に背かず」と、相訣別し、刃を引いて自殺す。眞に憐む可きなり。然れども大丈夫尸を馬革に裹むは伏波<sup>\*</sup>の壯語、亦壯士の常のみ、何ぞ之を嗟かむや。唯酸鼻心を刺し、目見るに忍びず、耳聞くに堪へざるものは、婦女の操烈、國家と共に亡ぶる者舉げて數ふ可からざりしことなり。今にして其の慘狀を懷へば、茫として夢の如く、恍として幻の若く、覺えず、涙下るなり。

<sup>\*</sup>馬援。後漢の光武帝に仕へて伏波將軍となる。  
(一七九)



二一 會津落城 下

(一) 明治元年。  
(二) 會津城の東七里  
に在り、要害の  
地なり。

其の年八月二十二日、勝軍山の敗報到る。士民呼んで曰く、敵軍飛來城下に迫る。と。時に散士三兄一弟あり。慈母小弟を一僕に託し、涙を揮つて遠く去らしむ。蓋し深意の存するあり。大兄は軍を監して越の後州に戦ひ、轉戦して城下に傷き、仲兄は野州に戦歿し、小兄は兵を督して境上に拒ぐ。家翁疲兵を勵まして郭門に戦つて傷き、叔父亦客兵を督し、瘡痕を裹みて尙激戦す。曉雨濛濛、日色光なく、砲聲轟轟、叫聲天に震ふ。散士時になほ幼なり。一矢を敵に放つて死せむと欲し、跪いて家人に訣別し、覺えず顔色悽愴たり。慈母叱して曰く、汝

幼なりと雖も武門の子なり。能く一敵將を斬りて、潔く尸を戰場に暴し、家名を損すこと勿れ。と。散士奮つて蹶起す。家人送つて門に至る。祖母呼んで曰く、努力せよ。と。乃ち涙を掩ふ。嗚呼、痛ましいかな、百年の恩情、永訣、言茲に盡きぬ。

家人神前に聚まり、香を焼きて祖先の靈に告げて曰く、事已に茲に至る、亦言ふべきなし。苟も餘生を亂離の間に偷まじ。潔く國家に殉じて死し、父兄をして後顧の累を絶たしめ、以て三百年來養成せし士風を表明する、眞に此の時に存す。只恨むらくは、我が公多年の孤忠、空しく水泡に屬し、反賊の臭名を負ふを。是終天の憾、海枯れ、山覆るも消し難し。と。妹、時に五歳なり。慈母謂つて曰く、敵兵已に我が家に迫る。今汝と



泉下に赴き、以て父兄を待たむとす。聞く、地下途暗しと、今我が一族皆亡ぶ、人の又香火を供するなし。汝相抱持して其の途に迷離する勿れ」と。火を放つて從容義に就けり。噫、悲しいかな。

かくて孤軍益々重圍の中に陥り、硝焰空を覆うて日光なく、風雪膚を刺して糧餉已に盡き、士卒日に傷亡して外に援兵なく、孤城を以て天下の大軍に抗する三旬、遂に降旗を建つ。この役や、婦女の竊かに軍に従ひ死傷するもの多し。一婦あり、其の良人・父兄と皆戰歿するを聞き、手づから老母と、一子とを刃し、辭世一首を詠じて曰く、  
識るや人、まもるにたへて家も身も

焼くやほのほの赤きこころを。

と、火を放つて自殺す。一姫あり、一藩降ると聞き、憂憤指を嚙んで壁上に血書して曰く、

君王城上建降旗。妾在深宮何得知。

と、宮前の松樹に縊る。又一婦あり、月明に乘じ、笄を以て國歌を城中の白壁に刻して曰く、

明日よりはいづくの人か眺むらむ、

なれし大城にのこる月かけ。

と、髪を薙つて死者の冥福を祈れり。士卒も憤恚自殺するものあり。

主將諭して曰く、「空しく死して名を滅せむよりは、恥を忍



び、生を全うして、一旦外患あるの日、誓つて神州の爲に生命を鋒鏑に委し、而して是非正邪を死後に定めむには若かず。と。茲に於て一藩恨を忍び、涙を呑み、轅門に降る。我が公は檻車、京に送られ、將士は東西に虜となり、幽囚數歲、俗吏に罵られ、獄卒に辱かしめられ、後又極北の荒野に放謫せられ、悲風蕭殺、牧馬夜嘶き、飢ゑて山下に蕨薇を掘り、寤して海濱に海藻を拾ひ、以て餘生を保てり。述、遼、竄、斥、なほ悔いざる所以のものは、他日我が帝國の爲に、翰躬命を致し、往年の志を天下後世に伸べ、死者に泉下に謝せむと欲するのみ。

(柴東海散士—佳人之奇遇)

一一一 關が原古戰場

(一) 美濃國不破郡關が原村大字松尾にある川、今は藤子川と云ふ。  
(二) 不破の關址。  
(三) 慶長五年(三六〇)

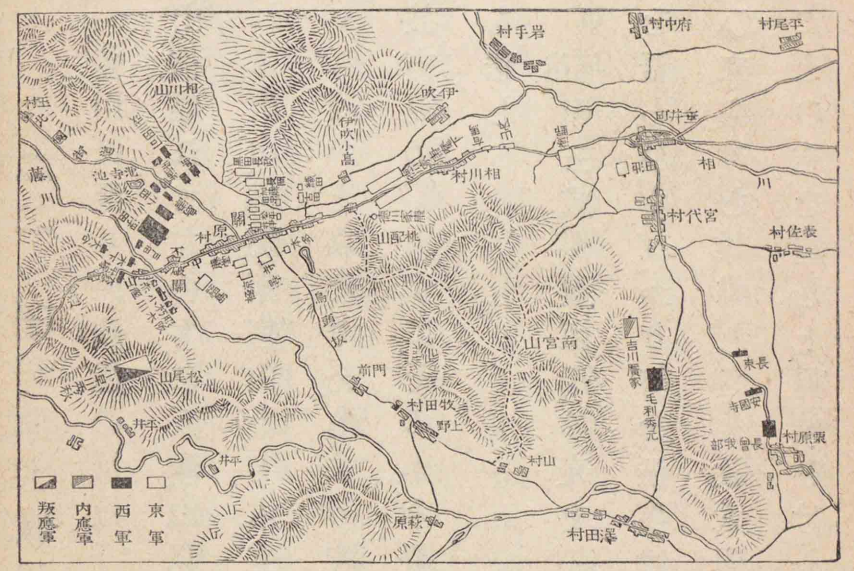
藤川に至りぬ。關屋の址は今定かならず。右の方に松尾山、稍離れて左の方に天満山見ゆ。關が原の驛に至れば、連なれる山山、桃配、南宮山など木立深く茂れり。慶長の昔を思ひやればいと哀なり。えも去りやらず、しばし打憩らひて、此方彼方見めぐらすに、そのかみ覺えて、何となくさしぐまるるも悲し。

石田三成が豊臣氏の衰をいたく歎きて、關西の大名どもを語らひ、さばかり勢を振ひけむ。徳川氏を討滅ぼさむと思ひ立ちけむ。雄雄しさよ。故太閤の御魂もあまがけりて、いかにその志を嬉しと見給ひけむ。軍の勝敗は時の運にありて、

(四) 三三三三〇〇



(二) 小早川秀秋、夙に東軍に内應したりき。(三三七一―三三七一)



戦の罪にあらざるとこそいへ。豊臣氏の衰へ行くべき時來れるは詮方なし。さりとしては徳川氏のこの度の軍、不義なりともいふべからず。居ながら關西の軍を迎へて、待ち戦ふべきにあらねば、ここまで討上りけむ、さるかたにのみじき智略といひつべし。ただ悪むべきは、かの松尾山にたて籠りけむ。秀秋よ、己が養

(三) 九月七日。

(三三) 毛利秀元・吉川廣家等なり。廣家夙に東軍に密約して動かざりき。

ひたてられし太閤の恩を忘れ、何の恨もあらざるべきに、秀頼親子の心をも思はで、徳川方にかたうどはしつらむ。ことわり知らぬ武士の習なりとて、あまりなる心ぞかし。

(三) その日となりて、戦は西・東の兵ども皆とりどりに敵を引きうけて更にひまもなし。矢叫の音はこだまをひびかし、流るる血汐は川となりて、戦酣になりけり。或は進むもあり、或は退くもありて、いづれとも未だわかぬものから、さばかり思ひ入りたりけむ心のほどもあればにや、ともすれば西の方進みざまになりぬ。よき所なりとて、三成方より烽火をうち挙げけり。かねていひ残しし南宮山の身方に知らせつれど、更に應ぜず。それをいかにと思ふ折しも、思ひがけぬに、



かの松尾山よりひた下りに、身方の陣に討入るものか。年月かけてたばかりけむ心も、皆水の泡と消えはてて、東の方の勝になりけるその有様、今も見る心地ぞする。

あはれ討滅ぼされけるつはもの心よ佛のいふらむ妄執ともなりぬべし。君をおもふ誠、今はむなしと見なしたりけむ三成が心、さばかりと思ひやられて、いとこそいたましけれ。さるをこのぬしの心の程をも思ひ知らで、姦臣ぞなど、悪しざまにいひなすらむは、いとも心うき事なり。それ徳川の世のほどこそあらめ、今誰に諛ひての論ひぞや。今日ここに來りて、思ひ出づるままに弔ひがてらとぞ。

(飯田武郷―蓬室文集)

(→) Mystery.  
(⇒) Miracle play.

二三 能

能は、その初は神慮を安めむ爲、神前にて神官等の演奏せしものたるに外ならざりき。今の二十五座などいふ里神樂に似て雅なりしものなるべく、歐洲中古の宗教劇<sup>ミステリ</sup>又はミラクルプレー<sup>ミ</sup>などに髣髴たりしものならむ。足利氏<sup>ミ</sup>のときに擧用ひられて、武家の式樂となりてよりは、武運を祈り、武功を祝賀するの用に供せられ、かねて主なる娛樂の具となれるなり。然るに當時はわが暗黒時代にして、文學の事は主として僧侶の手に存せしかば、能の脚本も亦同源より出でざるを得ざりき。随つて祝賀能の詞章中にすら、佛教



旨味の加はりしほどなれば、能の次第に發展して、かの支那劇乃至希臘劇に類する形式をとり來りしにつれて、主題の何たるに拘らず、一貫せる主意は毎に佛敎的となり、多少、明かに因果應報の避くべからざるを説きて、無常を諷し、發心を奨誘せり。幽靈精靈など幽冥界に屬するものを主人公となして、これが得脱を眼目とせる作の夥しきはこの理に因る。但し別に現在物と稱して、主として人情の纏綿を寫さむと試みたる普通の劇に近きものの無かりしにはあらず。されどそは甚だ少數なり。且つ槩して、詞か、理か、樂詞かに、幾分か、の佛敎旨味を帶びたり。

かくて秀吉時代を経て、徳川期の末に及びては、能は殆ど

\*嘉永六年(五三)  
米艦四隻來航す。

最早發展の餘地を見出す能はざるほどの洗鍊圓熟の極に達したり。時に黒船下田港に迫り、國內鼎の沸くがごとく、幕府の事日に非なりしかば、總て上・中流の閑事業は地に墜ちたり。就中、一に武家の特寵に依りて、藝術界に君臨したりし能の如きは、王政古に復し、藩廢せられ、縣置かれ、四民平等の世となりては、甚しく淪落し、一時はこのままに廢絶に歸するかとも危疑せられたりしが、機運幸に轉廻して、この二十年来は大いに繁榮を恢復せり。蓋しこれ主としてその固有の價值のおのづから然らしめし所ならむとは雖も、一は贈太政大臣岩倉具視の保護・奨勵に因り、一は寶生九郎・梅若實などの名手が、多年能く逆境に堪へて拮据黽勉せし功にも



\* Stereotype.

因るならむ。

能は今現に行はるるもの二百餘番あり。主なる人物は二人なるを通例とし、大抵時の一致と處の一致とを守りたる二場物より成れり。脚色も文脈も、多くはステロ版\*に取りたるが如く一定せり。

能は早くより數派にわかれたりしが、今尙依然として五派をなせり。金春・觀世・寶生・金剛・喜多これなり。聊かも斯道を踏まざる者より見れば、五派の間にさまで著しき藝風の異同なきが如くに思はるれど、その實、能樂ばかり傳統格式・祕訣・典型のむづかしきはなかるべく、随つて諸流の間に種種の隱微なる差別あり。各、その家格を嚴守して、一絲の紊れだ

に無からむ事を力む。保守は能の生命なり。足利氏以降、尠なくとも四百餘年を経たりしならむも、その大體の特質は依然たり。宛として一箇の結晶美術なり。武家的日本の美しき記念碑なり。

近時、外國人中の好事家・好樂家にして能を鑑賞する者漸く多く、而して邦人にして能の將來を憂慮して、その維持策に心を傾くる者も亦尠なからず。さるは新時代の傾向は必ずしも能に利ならざるが如く見ゆればなり。思ふに若しこの二者の間に何等かの聯絡成ることあらば、或は將來、能の上にて何等かの變化を醸し出すこと無きを保せじ。されど或は又能を改修するは畢竟ずるにこれを毀損するに外なら



百濟河成。(一五三)

元和元年(三七七) 徳川家康海内を一統す。

ずとして、深く懸念する者もあり。いづれにもせよ、能は本來が武家的上流の需尙に應じて興りしこと、かの雅樂が朝廷の嗜好に應ぜしにひとしければ中流以下の翫としては餘りに高雅莊重にして、簡古清淡なり。雅樂を河成・金岡以前の古代畫に比すべくば、能はかの土佐・狩野などの繪畫に比すべく、主として上・中流の慰み草たるに適すべし。されば將來はいさ知らず、元和偃武の當時に在りては、俄然として勃興せし商工社會の需尙に應じて、恰も繪畫に浮世繪派のありし如く、「淨瑠璃」といふ偶人劇と「歌舞伎」といふ平民劇との起りしこと、これ必然の勢なりといふべし。(坪内逍遙)

二四 羽衣

ワキ漁夫白龍。  
風早の三保の浦  
曲を漕ぐ舟の舟  
人騒ぐ、浪立つ  
らしも。(萬葉集)  
ツレ漁夫。  
萬里高山雲乍斂、  
一樓明月雨始晴  
(詩人玉屑)

風向ふ雲のうき  
浪立つと見て、  
釣せぬ先にかへ  
る舟人。(冷泉爲  
相)

ワキ一聲風早の三保の浦曲をこぐ舟の、浦人さわぐ浪路かな。サシ、これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。萬里の高山に雲忽に起り、一樓の明月に雨はじめて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつづく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身のながめにも、心空なるけしきかな。歌、忘れめや、山路をわけて清見瀉、遙かに三保の松原に、立連れいざや通はむ。風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せて人や歸るらむ。待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。ワキ詞、われ三保の松原にあがり、浦の景色をなが



むる所に、虚空に花ふり音楽聞え、靈香リョウカウ四方に薰ず。これただごとと思はぬ所に、これなる松に美しき衣かかれり。よりてみれば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさまとりて歸り、古き人にもみせ、家の寶となさばやと存候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。なにしにめされ候ぞ。

ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候程に、とりて歸り候よ。シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。本の如くにおき給へ。ワキ詞「そもこの衣のぬしとは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特にとどめおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絶え、天上に歸らむことも協ふま

じ。さりとは返したび給へ。

ワキ「この御詞を聞くよりも、いよいよ白龍力を得、本よりこの身は心なき、天の羽衣とりかくし、協ふまじとて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらむとすれば衣なし。ワキ「地にまた住めば下界なり。シテ「とやあらむ、かくやあらむと悲しめど、ワキ「白龍衣を返さねば、シテ「力及ばず、ワキ「せむかたも、地「涙の露の玉鬘、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目のまへに見えて、あさましや。シテ「天テの原ふりさけみれば霞立つ雲路まどひてゆくへしらずも。地「すみ馴れし空にいつしかゆく雲の、羨ましきけしきかな。迦陵嚩伽のなれなれし、聲今さらにわづかなる。雁

\*丹後風土記に見ゆる歌。



が音の歸りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや。こなたへ給はり候へ。ワキ詞「しばらく。承り及びたる天人の舞樂、ただ今ここに奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ詞「嬉しや。さては天上に歸らむことをえたり。この歡に迎もさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。ただ今ここに奏しつつ、世のうき人に傳ふべし。さりながら衣なくては協ふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ詞「いや、この衣を返しなば舞曲をなさてそのままに、天にやあがり給ふべ

き。シテ詞「いや、疑は人間にあり、天に偽なき物を。ワキ「あら恥かしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少女は衣を著しつつ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨に濕ふ花の袖、ワキ「一曲をかなで、シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿河舞、この時やはじめなるらむ。

地「それ久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空はかぎりもなければとて、久かたの空とは名附けたり。シテサシ「なかんづく月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣・黒衣の天人の數を三五に分つて、一月夜夜の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天少女、月の桂の身をわけて、假に東のするが舞、世に傳へ



春霞棚引きにけり、久方の月の桂も花や咲くらむ。(後撰集、紀貫之)

天津風雲の通路吹きとちよ、少女の姿しばしとどめむ。(古今集、良岑宗貞)

君が代は、天の羽衣稀にきて、撫づとも盡きぬ巖なるらむ。(拾遺集、讀人知らず)

たる曲とかや。クセ<sup>(二)</sup>春霞たなびきにけり、久かたの月の桂も花やさく。げに花桂色めくは、春のしるしかや。おもしろや、天



衣 羽

ならで、ここも妙なり天津風、雲の通ひぢ吹きとちよ。少女の姿しばしとどまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見瀉、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も松風も、のどかなる浦のありさま。その上天地は、何を隔てむ玉垣の、内外の神の御すゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ君が代は、あまの羽衣まれに來て、地撫づと

も盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて、かずかずの箏。笛<sup>(一)</sup>琴<sup>(二)</sup>箏<sup>(三)</sup>篋<sup>(四)</sup>孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ南無歸命月天子、本地大勢至。地東遊の舞の一曲。序の舞。シテ或は天つみ空の緑の衣。地又は春立つ霞の衣。シテ色香も妙なり、少女の裳。地左右左、左右颯颯の花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。破の舞。東遊のかずかずに、その名も月の宮人は、三五夜中の空に又、満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、幽



かになりて、天つみ空の霞にまぎれて失せにけり。(謠曲)

### 二五 能狂言

猿樂の能と離るべからざる關係あるものは能の狂言なり。猿樂の名は滑稽の所作といふ意味にて既に中古の物語に見え、神社に奉仕せし猿樂の人が猿樂の能の役者となりし歴史より察すれば、猿樂の名はむしろ狂言に屬すべきものにして、後に發達せる能樂の爲に、その名を奪はれたるものなり。しかも能樂發達の後と雖も、尙これと密接の關係を有し、今日に至るまで、能樂興行の際には、必ずその中間に狂言を演ず。一方能樂の悲劇的なるに對して、喜劇的性質を帶

びたる狂言が、その中間に插まれ、相錯綜して一日の歡を悉さしむるは、面白き對照といはざるべからず。然れども狂言のあくまで能樂の附屬物の如き位置に落ちたるは、その性質上及び事實上より、しかあるべき勢あればなり。蓋し能樂に於ては、古英雄・古美人を材料として、懷古の情を起さしめ、神明・佛陀の功驗を示して、神神しさ、いやちこさを感じしむるに反し、狂言に於ては、無學なる大名、破戒の僧、似而非修驗者等を主人公として、一方は眞摯に、一方は滑稽に、一方は尊嚴の念を起さしむべく、一方は輕蔑の念を起さしむるに足ればなり。又謠曲は古來の秀歌・名句を引用し、佛典の教義を説き、章曲に於ても頗る學者的なるに反し、狂言は當時の平



\*Rhythm.

話を以てこれを綴り、章句の上にも學識を要せず。又その章曲を歌ふにも、謠曲は音樂的<sup>\*</sup>リズムを諳んじて、曲節に合せざるべからず。狂言はもとよりこの事なし。舞容に於ても、能樂は希臘の古劇の如く、舞方の上手は即ち役者にして、役者としての技術には、専門の技術を要すること甚だ大なるに、狂言は比較的單純なり。又狂言は能の數番の中間に挿入せらるるが爲に、その時間は役者の休息の爲、又は扮装を直す<sup>\*</sup>が爲に用ひられ、ことに閒の狂言の如きは、前ジテが樂屋に入りて、後ジテの裝束に改むる閒に用ひらるるが如き情態なるを以て、勢、能樂に對しては附庸の地位に立たざるべからず。希臘の古劇を察するにも、喜劇悲劇の根本は相同じき

が如く、我が能樂狂言も亦神事に起因して兩面に發達せしこと甚だ相似たりと雖も、喜劇的方面を代表せる狂言は、永く能樂の附庸となり、文安田樂能記・糺河原勸進能記等に於て、早く已に能樂の閒閒に演ぜられたるを見る。ただ、その當時の言語を以て記して、全文悉く對話より成り、毫も地の文を挿まざるは、謠曲に比して一層純劇詩的性質を有せりといふべく、後世の脚本の根源をなせりといふべし。

狂言の作者及び製作の年代等の不明なるは、なほ謠曲の如し。千篇一律にして、大抵同一模型の蹈襲なること、一時の製作に非ずして、時代を逐うて漸次に増加せしならむと想像し得べき事、亦相同じ。而してその國民間に流布せる傳説



(一) Sage.  
傳説。

(二) Märchen.  
童話。

(三) Parody.  
滑稽擬文。

を本とせるに於ても、亦兩者相似たり。但し謠曲は英雄・高僧等の偉人傳説に基けるもの多く、狂言は單純なる童話を資料とせること、その相違の點とす。即ち謠曲は「ザーゲ」を根本とし、狂言は「メルヘン」を基礎とせる觀あり。狂言已に能樂の附庸たるを甘んずるや、謠曲に擬して滑稽を仕組みたるも尠なからず、通圓の如き、老武者の如き、若市の如き、その適例といはむか、通圓は宇治の茶坊主なれば、頼政に似せて作りたるなり。老武者も若市も、修羅能に擬して作れるなり。皆、一種の「パロディ」なり。このわたりの愚僧なり」と名告らせ、貝をも持たぬ山伏の、道道嘘を吹かうよ」と云ふ如き、謠曲の摹倣に非ざるはなし。舞容も科白も、謠曲に於ては尊嚴・莊重の感

を惹起すを主眼とし、狂言に於ては輕快・飄逸を目的とす。この對照ありて能樂の全美をなすなり。

謠曲に通ぜる特性は説教なり、教訓なり、佛陀神明に關し、歌道・古實に關し、その一草一木の由來・緣起をも敍べて、術學的に且つ説明的なり。狂言は寧ろ之を知らざるを以て滑稽とし、煩瑣なる歌學・故實、一切の祕事・祕傳は皆嘲笑の材料に取られたり。この見方よりすれば、狂言は正しく一種の諷刺的文學の性質を帯びたりといふべし。滑稽と諷刺とは、もとより甚だ相近きものなればなり。(芳賀矢一「國文學歴史代選」)

## 二六 薩摩守



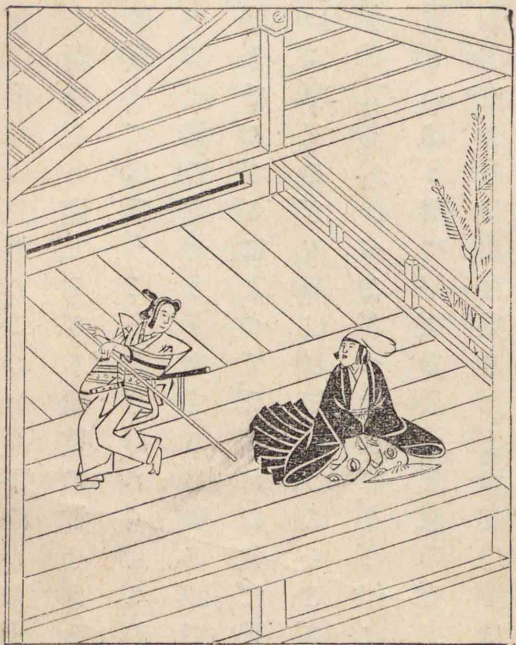
茶屋「罷出でたる者は邊りの茶屋でござる。往き來る人に今日も茶を賣らうと存ずる。扱も扱も今日はさびしい事かな。人どほりもござらぬよ。」

僧「罷出でたるは關東邊の愚僧でござる。さやうにござれば諸國修行をいたし、又これよりも大阪天王寺へ參らうと存ずる。まづそろそろ參らう。」

茶屋「なう、申し御坊、お茶まゐらぬか。」僧「これは扱知らぬ人の茶をくれうといやる。立寄つて飲べうと存ずる。扱も道を歩けば、あのやうなる慈悲深い人もござるほどにはあ、只今はお茶飲めとおつしやる、一つ飲べませう。」茶屋「はあ、何程なりとも參りませう。」僧「扱も扱も、これはよい茶でござるの。」茶屋「いや、身どもが手茶でござりまする。」僧「も一つ飲べませう。」茶屋「はあ、參りませう。」僧「これは熱うござる。」茶屋「畏つてござる。うめて進ませませう。」

僧「ああ扱喉渴きにござつたに、丁度ようござる。も、かう參る。」茶屋「ござ

りまするか。」僧「忝うこそござれ、まう參る。」茶屋「まをし御坊、何も忘れはなされませぬか。」僧「されば、數珠もおりやり、笠もある。いえ何も忘れは致さぬ。」茶屋「なう御坊、茶代を忘れさつしやれた。」僧「ふん、その茶には代



が入りますか。」茶屋「はれ扱、茶屋の茶に錢のいらぬと狂いふ事がおぢやるか。一服言一錢でおりやるはいの。」僧「はれ、したならば飲むまいも摩のをば、なうなう、茶屋殿、錢守は持合せませぬほどに、この數珠を置いて參る。」茶屋「して、ほんぼんにござらぬか。」僧「なかなか、おりやらぬ。」茶屋「して又こなたは、何方へ向けてござる。」僧「いや、かう天王寺へ參ります。」茶屋「まちつと行かしやれば、神崎の渡



とて船がござるが、それは何と遊ばつしやるぞ。僧いやそれは渡つて参ろ。茶屋渡るやうな川ではござらぬ。僧いや其の儀ならば、船賃も持たず、神佛は見透し、これから下向いたそ。茶屋なうなう、見ますれば、餘り痛はしい儀でござる。船賃の進ぜう。僧これは扱、茶の錢進ぜぬ上に船賃までは忝うこそござれ。さらばこれへ下されい。茶屋なう御坊、いや、某船賃の進ぜうと申するは、別の事ではござらぬ。あの渡守は秀句好きでござるによつて、こなたにただ乗せる秀句を教へて進ぜうといふ事でござる。僧はれ扱、忝うこそござれ。してそれは何と申しませうぞ。茶屋あれへござつたらば、まづ船に乗らつしやれう。その時に、船賃といはう時に、平家の公達、薩摩の守忠、ぢやとおつしやれい。僧はあ出来ました。ただ乗るによつて忠度はあ忝うこそござれ。かう参ります。茶屋、下向道には寄らつしやれい。僧はあ、さらばこそよ。茶屋のいふ如く大きなる渡がある。渡守が居ぬが、何處許に居るぞ。

船頭罷出でたるは、このところの渡守でござる。今日は日竝もようござるほどに、定めて乗客もござらう。そろそろ参ろ。僧いや、あれへ渡守と見えて居ります。呼びませう。ほうい。船頭何ぢやい。僧船に乗らうやい。船頭何人ほどあるぞ。僧百人もおりやるはいの。船頭いやそんならば乗せう。御坊、してその百人の道者は、僧いや、皆は後から来る。某は先達ぢやによつて、先へ行かねばならぬ。渡してたもれ。船頭何と仰しやるぞいの。一人二人を渡す所ではおぢやらぬいの。僧なう船頭、百人の船賃の渡さうほどに、乗せてたもれ。船頭いやそんなら渡しませう。さあさあ乗らつしやれい。なうなう、こなたは、今のやうな乗りやうがあるものでおぢやるか。船がいかう不案内と見えておりやるよ。僧なう船頭、この船には底に孔やなんどはないか。船頭はあ、あの坊のいはしますことはい。孔があつてよいものでおりやるか。して御坊は何方から何方へござるぞ。僧いや、關東から天王寺へ参る者でおりやる。船頭お若うござるが、近頃殊勝にござる。して御坊



いひたい事がござる。僧何でかござるぞ。船頭いや、船賃の貰ひませう。僧いや、向ふへ著いてから進ぜう。船頭なう御坊もともさういうて、乗逃げが數多うおぢやつた。今はそれぢやによつて、川中で取ります。それにおくしやらぬ人は、向ふな島へ打上げて置きます。僧あゝ可怖い事をおしやる。船賃のしたら渡そ。船頭受取りませう。僧平家の公達。船頭いや、こごとを言はずとも、渡しやれいの。僧いや、秀句で渡そ。船頭いや、何とおしやるぞ。某が秀句を好くことが、關東まで聞えておぢやるか。僧なかなか、神崎の渡守秀句好きぢやといふことは、關東に知らぬ者はおぢやらぬ。船頭扱も扱も、それはまことでおぢやるか、眞實か。わはは、扱も扱も、得を取るより名を取れぢや。秀句で受取りませう。して何と。僧平家の公達、薩摩の守。面白ござるか。船頭あゝ面白ござるは。して後は、僧向ふで渡そ。船頭なかなか、向ふで受取りませうぞ。後が面白ござるの。僧面白いこととござる。船頭はれ扱、こなたのやうなる御坊とも存ぜず、乗せうの、乗せまいのと申した。又、下向道には二日

も二日も留めまして、船遊をさしませうぞ。僧忝うこそござれ。船頭身拵をさつしやれい。やがて船は著きまするぞ。僧心えてござる。船頭さあ、上らつしやれい。して今のは、僧平家の公達、薩摩の守、薩摩の守、守でおぢやる。船頭いや、その後が聞きたうおぢやる。僧はつて、茶屋が何とやらいうたが。船頭なう坊、秀句に茶屋は入るまい。後はいの、何とめさるぞ。いや、後が聞きたうござる。僧後は平家の公達、薩摩の守、はあ、今思ひつけた。船頭何と。僧ものと。船頭何と。僧あをのりのひきばし。船頭、何でもないこと。とつとと行かします。〔狂言記〕



修訂新撰國語讀本卷八終

大正三年十二月四日 改訂再版印刷  
 大正三年十二月七日 改訂再版發行  
 大正六年十月二十三日 修訂印刷  
 大正六年十月二十八日 修訂發行  
 大正七年一月十日 修訂再版印刷  
 大正七年一月十四日 修訂再版發行

定價	卷一、二 各金參拾六錢	大正七年七月	卷一、二 各金四拾壹錢
定價	卷三、四 各金參拾壹錢	大正七年七月	卷三、四 各金參拾六錢
定價	卷五より各金貳拾九錢	大正七年七月	卷五より各金參拾參錢

東京市小石川區大塚窪町八番地

著者 佐々政一

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 株式會社 明治書院

取締役社長 三樹一平

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 島連太郎



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

長電話本局二三九八番



